松本市文化財調査報告 No.106

SHIMOHARA

松本市下原遺跡 II

―緊急発掘調査報告書―

1993・3

松本市教育委員会

SHIMOHARA

松本市下原遺跡 Ⅱ

―緊急発掘調査報告書―

1993・3

松本市教育委員会

序

松本市東部に位置する山辺地区では、数多くの学術調査及び開発に伴う発掘調査が行われており、さまざまな遺跡の存在が知られていました。このたび土地区画整理事業が計画された里山辺の新井地籍には、下原遺跡があります。そこで文化財の保護を図るため、松本市が新井土地区画整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行いました。発掘調査は市教育委員会の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成4年5月から同年7月にかけて行われました。作業は猛暑、乾燥に悩まされましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居址15軒のほか、掘立柱建物址11棟、近世の墓5基などを発見し、また同時期の遺物を数多く得ました。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思います。

しかしながら開発事業に先だって行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるために開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通じて、文化財保護への理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなかで発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査に際して、多大なご理解を頂いた新井地区土地区画整理組合の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会　教育長　守屋立秋

例　言

1．本書は平成４年５月28日から７月13日にかけて行われた松本市大字里山辺新井1579番地ほかに所在する下原遺跡（第２次調査）の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は、平成４年度松本市新井土地区画整理事業に伴う発掘調査であり、松本市が新井土地区画整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。

3．本調査及び本書の作成は、松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。

4．本書の執筆は、第１章：事務局、第２章第１節：森　義直、第３章第２節：木下　守、第３節（1）：竹原　学、（2）：木下　守、（3）：三村竜一、その他の項目を竹内靖長が担当した。

5．本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。

遺物復原：内田和子、上條尚美、倉科祥恵、堤加代子、高山一恵、丸山恵子、村松恵美子、村山牧枝

遺物実測：木下守、竹原久子、松尾明恵、三村竜一、中村朝香、MIN AUNG THWE、平出貴史

遺物トレース：木下守、竹原久子、松尾明恵、中村朝香

遺構図整理・一覧表作成：石合英子

遺構図トレース：開鳴八重子

写真撮影：宮島洋一（遺物）、木下守、竹内靖長、三村竜一（遺構）

6．本文中の遺構名は、以下のように略した。

第○号竪穴住居址→○住　　第○号掘立柱建物址→○建

第○号竪穴状遺構→○竪　　第○号土坑→○土

ピット○→P○

7．骨の鑑定は、西沢寿晃氏にお願いした。また鉄器については田中正治郎氏の御教示を得た。

8．本調査に関する出土遺物及び測量・実測図・写真類は松本市立考古博物館が保管している。

目　次

序

例言

目次

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯……3

第２節　調査体制……3

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の立地と地形地質……5

第２節　周辺遺跡……7

第３章　調査結果

第１節　調査の概要……9

第２節　遺構

（１）竪穴住居址……10　（２）竪穴状遺構……14

（３）掘立柱建物址……15　（４）墓址……17

（５）土坑・ピット……18　（６）溝状遺構……19

第３節　遺物

（１）土器……20　（２）金属製品……23

（３）石器……24　（４）土製品……24

第４章　調査のまとめ……25

図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡……4
第２図　調査範囲……6
第３図　全体図……8
第４図　第５号住居址……26
第５図　第６号住居址……27
第６図　第７号住居址……28
第７図　第９号住居址……29
第８図　第10号住居址……30
第９図　第８・11号住居址……31
第10図　第12・13号住居址……32
第11図　第14号住居址……33
第12図　第15・17号住居址、
　　第１号竪穴状遺構……34
第13図　第16・18号住居址……35
第14図　第19号住居址……36
第15図　第２・３号建物址……37
第16図　第４・５・６号建物址……38
第17図　第７・８号建物址……39
第18図　第９・12号建物址……40
第19図　第10・11号建物址……41
第20図　第１号溝状遺構……42
第21図　墓址・土坑……43
第22図　土器（１）……44
第23図　土器（２）……45
第24図　土器（３）……46
第25図　土器（４）……47
第26図　土器（５）……48
第27図　土器（６）……49
第28図　鉄製品・銭貨・石器・土製品……50

表 目 次

第１表　下原遺跡の過去の調査……9
第２表　住居址一覧表……51
第３表　建物址一覧表……51
第４表　出土銭一覧表……53

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

下原遺跡は松本市東部の里山辺地区にあり、薄川扇状地の扇央に位置する。本遺跡を含む周辺地域は信濃国府推定地の１つにも考えられており、過去数次にわたる『推定信濃国府跡』などの発掘調査では多くの遺構・遺物を発見している。これらの結果から、本遺跡では古墳時代から奈良・平安時代の集落址の検出が予想されていた。

平成４年度、里山辺新井地籍に土地区画整理事業が計画された。その範囲が本遺跡に及んでいたため、(財)松本市開発公社と松本市教育委員会の二者で協議した結果、遺跡の破壊がやむなきに至り、記録保存する必要が生じた。そこで、松本市は平成４年５月１日付で、新井土地区画整理組合と埋蔵文化財保護のために発掘調査の委託契約を締結した。

松本市教育委員会では発掘調査業務を(財)松本市教育文化振興財団に委託し、松本市立考古博物館が発掘調査を実施する運びとなった。

第２節　調査体制

調査団長　松村好雄（～Ｈ４．６）、守屋立秋（松本市教育委員会教育長）

現場担当者　木下守、竹内靖長、三村竜一（考古博物館）

発掘調査員　西沢寿晃、三村肇、森義直、竹原久子、松尾明恵

協　力　者　青柳洋子、赤羽貞人、赤羽紀子、飯田三男、石合英子、石川末四郎、内田和子、太田千尋、大山長一、岡部登喜子、開鳴八重子、上条きみ子、上条尚美、久根下三枝子、倉科祥恵、小岩井美代子、奥喜義、小松正子、斉藤政雄、佐々木保二、佐藤加津子、袖山勝美、高野尚子、高山一恵、田口吉重、田村かつよ、堤加代子、鶴川登、中島新嗣、中村朝香、中村恵子、西村好、平林薫、平出貴史、牧久雄、丸山恵子、三澤元太郎、MIN AING THWE、村松恵美子、村山牧枝、森井柳三郎、吉田勝

事　務　局

市教育委員会：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窠田雅之（主任）

(財)松本市教育文化振興財団

事　務　局：深沢豊（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：神澤昌二郎(館長)、直井雅尚、関沢聡(主任)、久保田剛(主事)、荒井由美、藤原美智子

●調査地

〈遺　跡〉

1. 大輔原
2. 立石
3. 前田
4. 塚田
5. 横田
6. 惣社北
7. 古屋敷
8. 女鳥羽川
9. 宮北
10. 下原
11. 新井
12. 荒町
13. 兎川寺
14. 山田
15. 藤井
16. 堀の内
17. 矢崎
18. 四ツ谷
19. 県町
20. 針塚
21. 薄町
22. 鎌田
23. 上金井
24. 石上
25. 堤橋
26. 筑摩
27. 松本工業高校
28. 富士電機
29. 三才
30. 神田
31. 千鹿頭北
32. 御符
33. 林山腰
34. 大嵩崎
35. 南方
36. 橋倉

〈古　墳〉

ア. 御母家2号
イ. 御母家1号
ウ. 山田入
エ. 丸山
オ. 藤井1号
カ. 藤井2号
キ. 卓塚
ク. 上金井
ケ. 古宮
コ. 猫塚
サ. 針塚
シ. 大塚2号
ス. 大塚1号
セ. 荒町
ソ. 北河原屋敷
タ. 県塚2号
チ. 県塚1号
ツ. 巾上
テ. 御符
ト. 南方

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡

第２章　遺跡の環境

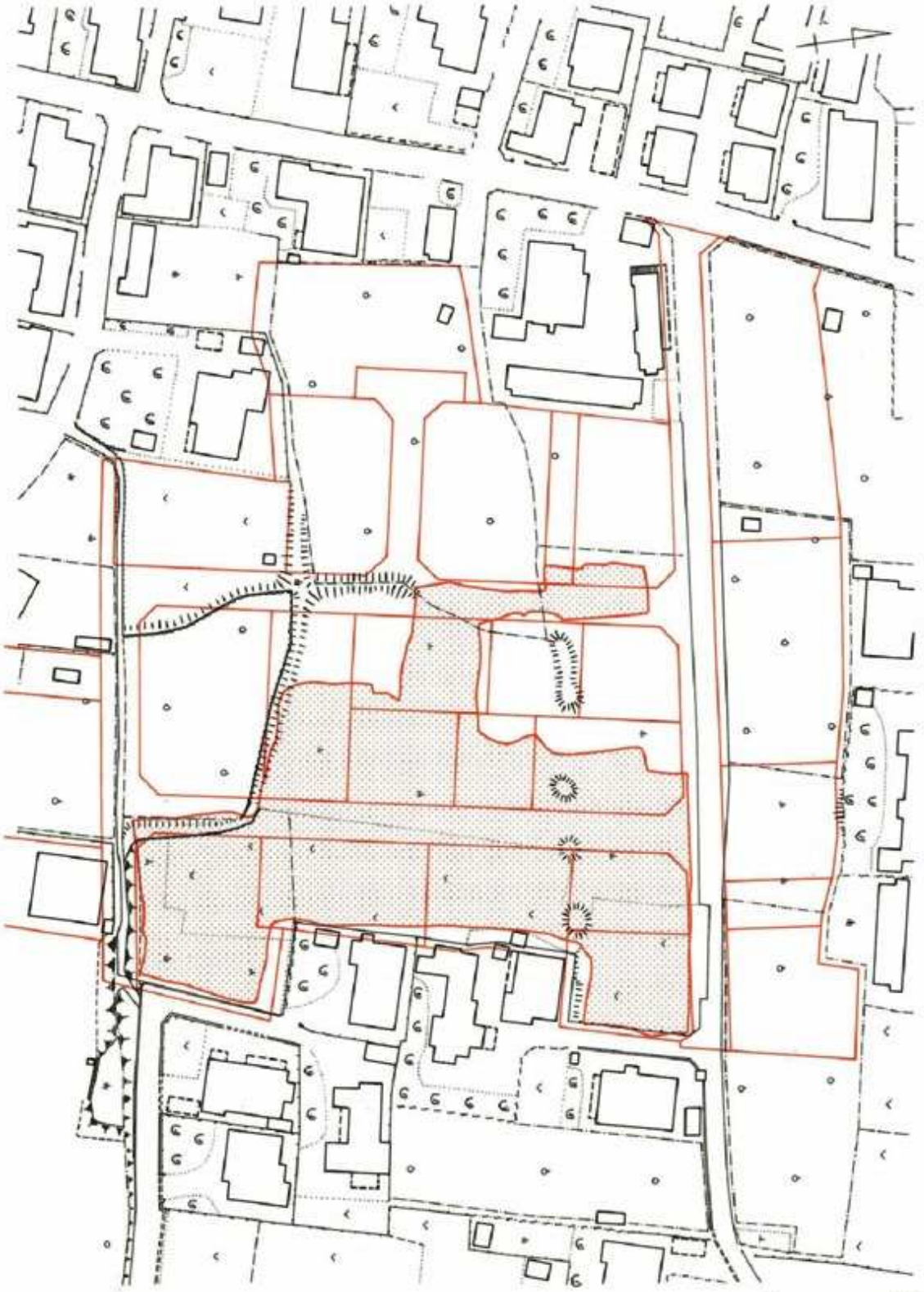
第１節　遺跡の立地と地形地質

本遺跡は松本市の北東にあり、東側に連なる筑摩山系の三峯山、美ヶ原付近に源を発して西流する薄川によって形成された扇状地と筑摩山系の三才山峠、武石峠、袴越山付近に源を発して西流し、稲倉付近で流路を約90°左に変えて南流する女鳥羽川によって形成された扇状地の交差点近くの標高620ｍ地点に位置している。したがって遺跡は、南に薄川、西に女鳥羽川が近くを流れ、直交する両河川のほぼ２等分線上にあるが、地形的には薄川の影響を強く受けており、扇端部に近く西に向かって緩く傾斜している。さらに、この両扇状地が交差しやや低地化しているところを、袴越山の西南斜面を流下する沢が集まり湯川となって西流し、本遺跡の北側近くを流れている。このように、本遺跡はこれら三河川の堆積物が複雑に入り混ざった堆積環境にあるが、薄川の堆積物が主体であり、湯川の堆積物も混入している。なお、女鳥羽川の礫には特有の黒色ガラス質安山岩を含む砂礫層も存在することから、女鳥羽川の大洪水時は、この付近まで冠水したものとみられる。これら三河川の礫の供給源は、いずれも筑摩山地の新生代第三紀の内村層のものであり、砂岩、泥岩と玢岩、ガラス質安山岩、緑色凝灰岩、輝石安山岩、石英閃緑岩などから成っており、これらの礫の細粒化した砂やシルトや粘土などが、ふるい分けの悪い状態で礫の間を埋めている。

これら三河川のうち主流である薄川と女鳥羽川はいずれも河況係数の極めて大きな荒れ川であるので、この付近は堆積の安定期は少なく、本遺跡近くで３ｍ程掘り進んだ工事用の穴をみても、ふるい分けの悪い巨礫混じりの洪水性堆積物が主体で二、三安定期を示す薄い含有機物暗褐色土層がみられるだけである。したがって、中世以前の水路が安定していなかった頃は、しばしば三河川のいずれかによる洪水に見舞われて長く定住することができなかったものと推定される。

〈本遺跡付近〉

古墳時代以前の大規模な洪水により入江状のふるい分けの悪い幾筋もの微高地が形成され、この上部に古墳時代の遺構が営まれ、その後これらの堆積物中のシルト層が小洪水や雨水で洗い流されてきて、微高地の低部を埋めている。これらの遺構を覆って歴史時代になってからの洪水層が20～30cmの厚さで載り、現表土を形成しているが、この表土中の礫は、耕地化の際に拾い出され各所にヤッカとして存在している。



第2図　調査範囲

第2節　周辺遺跡

下原遺跡は、薄川扇状地の扇央部に位置する。薄川段丘および扇状地上には多くの遺跡が分布しており、近年の調査により次第にその様相が明らかになりつつある。当該地域にみられる遺跡は、時期幅がある複合遺跡が多くみられる。ここでは、発掘調査が行われた遺跡を中心に時代ごとに概観したい。

旧石器時代の遺跡は、弘法山古墳東麓でポイントが採集されているが、薄川流域では見つかっていない。

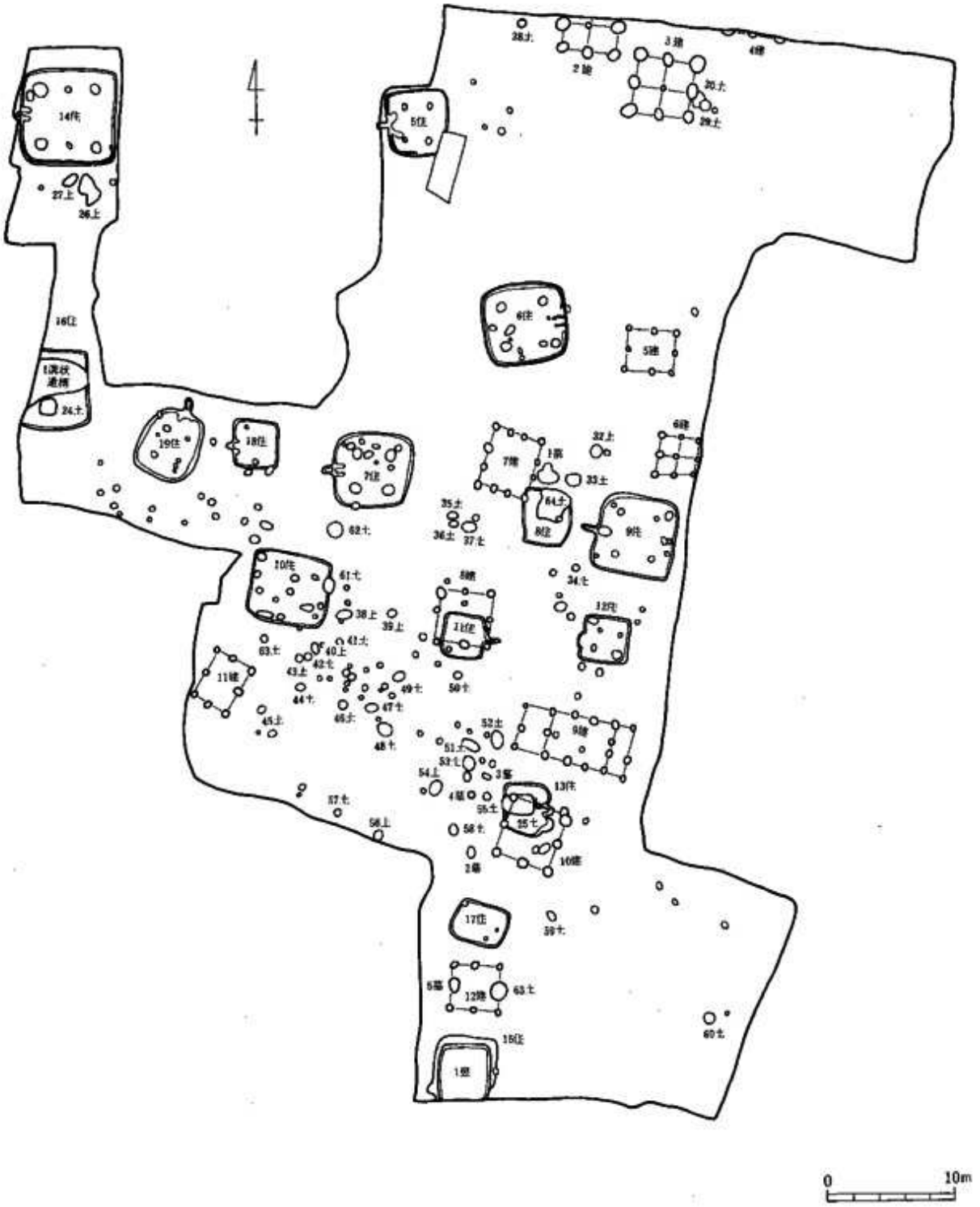
縄文時代は、薄川両岸の山麓斜面および扇状地部分に分布する。薄川上流の大和合周辺では早期の遺物が出土している。薄川右岸では、石上遺跡（前期末～中期初頭）・鎌田遺跡（前期末～中期初頭）・堀の内遺跡（中期初頭）が分布する。左岸では、林山腰遺跡（中期～後期）・南方遺跡（早期～晩期）・千鹿頭北遺跡（中期）などがみられる。林山腰遺跡からは、過去に大形の石棒が2本出土しており、1987年の発掘調査では後期の敷石住居址も検出されている。

弥生時代の遺跡は、薄川中・下流域の河岸段丘と扇状地末端の低地に分布する。当該期の集落は、県町遺跡・鎌田遺跡・堀の内遺跡で調査されている。特に県町遺跡では弥生中期末を中心に後期・古墳時代～平安時代にかけて82軒の住居址が検出されている。この他、元屋敷遺跡・総社宮北遺跡などから遺物を得ている。これらの遺跡群より上流右岸に位置する針塚遺跡では、弥生前期末の再葬墓群が見つかっている。ここから出土した遠賀川・条痕文系・氷式の土器群は、中部高地での弥生文化の波及過程を究明する上で重要な資料となった。

古墳時代では薄川両岸縁辺部と山麓部に古墳、中・下流域の河岸段丘と扇状地部に集落遺跡が分布する。古墳では、薄川右岸に針塚古墳に代表される積石塚古墳群がある。薄町から荒町にかけては、大塚古墳・古宮古墳などの後期の積石塚古墳がみられる。左岸では南方古墳・巾上古墳・御神符古墳などがある。集落遺跡では、右岸に下原遺跡・県町遺跡でそれぞれ後期の住居址が調査されている。左岸では、千鹿頭北遺跡で前期7・後期40軒の住居址が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡は、薄川中・下流域の両岸に広く分布する。薄川右岸では、堀の内遺跡（67軒）・薄町・石上遺跡（43軒）・県町遺跡（47軒）・針塚遺跡などで調査が行われ、多くの住居址を検出している。左岸では千鹿頭北遺跡（17軒）・林山腰遺跡（2軒）などにみられる。

中世以降については、大塚古墳・薄町・石上・南方遺跡などで遺物を得ているが、検出例が少なく判然としない。



第3図 全 体 図

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

下原遺跡の調査は、1986(昭和61)年に続いて第２次調査となる。しかし、過去に実施された推定信濃国府の数次にわたる調査においても下原遺跡の範囲内を調査している。これらの過去の調査については、第１表のとおりである。

1986年度に実施された第１次調査では、竪穴住居址１～４・土坑１～23・ピット１～54・掘立柱建物址１の遺構が検出されている。今回の第２次調査は、１次調査の遺構番号に継続して以下のように付けた。竪穴住居址15(５～19号)・掘立柱建物址11(２～12号)・竪穴状遺構１(１号)・土坑40(24～63号)・墓址５(１～５号)・ピット118(55～172号)・溝状遺構１(１号)が検出されている。

調査地点は、東西方向に延びる尾根状の微高地に位置しており、西へ緩く傾斜している。遺構はこの微高地上を中心に分布している。検出された遺構の時期は、古墳時代後期(７世紀後半)から奈良時代(８世紀末)が中心となり、若干の平安時代後半(11世紀)・近世がみられる。遺構の特徴としては、比較的大形な竪穴住居址が多いこと、11棟もの掘立柱建物址が検出されていることなどがあげられる。

第１表　下原遺跡の過去の調査

調査年度	調　査　名	調査地点	遺　　構	遺　　物	時　　代
1984年	推定信濃国府第３次調査	A地点	不明	縄文土器片 銭貨、鉄滓	縄文
1984年	推定信濃国府第３次調査	B地点	不明	須恵器	平安
1984年	推定信濃国府第３次調査	D地点 山辺中学校	竪穴住居址１	土師器	古墳末
1985年	推定信濃国府第４次調査	山辺中学校	竪穴住居址１	須恵器、土師器	奈良～平安
1986年	松本市下原遺跡	山辺中学校	竪穴住居址４・土坑23・ピット54・掘立柱建物址１	土師器、須恵器、縄文土器、青磁	古墳後期～末
1992年	松本市下原遺跡II	新井土地区画整理	竪穴住居址15・土坑40・ピット118・掘立柱建物址11	土師器・須恵器・青磁・銭貨・鉄器	古墳末～奈良、平安後期

第2節　遺構

(1)　竪穴住居址

竪穴住居址は15軒（5～19住）確認されている。その内訳は、古墳時代後期末に属するものが6軒、奈良・平安時代に属するものが9軒である。住居址同士の切り合いは1例もなく、遺構の配置は疎らである。また、北と南に一部東に張り出す形で調査区を設定したが、その部分には遺構が確認されず、遺跡の東端をとらえることができた。住居の廃絶後、埋没過程において礫の投げ込みがあった住居址が、15軒中11軒と多く見られた。以下、時代別に概観する。

①　古墳時代後期

古墳時代後期に属する竪穴住居址は、当初B区として調査を開始した北西隅に検出した14住を最大規模として、調査区北半部に6・9・14・16・18・19住の6軒確認した。時期はすべて末期に属している。調査区北半部は5住を除きすべて古墳時代後期末の住居址で、主軸方向が統一されていて計画的な配置が窺える。以下、個別に記述する。

第6号住居址（第5図）

検出：北半部中央に検出した。規模は6.44m×6.24mを測り隅丸方形を呈する。カマド：東壁中央内側に石組を確認し、粘土は確認できなかったが、焼土・炭化物粒の混入をもってカマドとした。床：小礫を多量に含み、黄褐色を呈するが軟弱である。壁：壁高15～45cmを測り、ほぼ直に立ち上がる。ピット：P_1～P_4の主柱穴を含め10個検出している。主柱穴は断面形に柱痕を残すが、埋土は小礫を含む暗褐色土で分層できなかった。その他のピットも覆土は小礫を含む暗褐色土単層で性格は不明である。諸施設：壁構築のためと考えられる周溝が全体に回る。覆土：自然埋没で2層に分層したが、埋没過程において1層中に多量の拳大から人頭大の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：カマド周辺の床面直上に集中的に土師器の甕などが出土している。

第9号住居址（第7図）

検出：調査区東際中央に検出した。規模は古代の竪穴住居址中最大の6.12m×6.12mを測り、隅丸方形を呈する。カマド：西壁中央を掘り込み芯石に粘土を用い袖を構築した痕跡が窺える。火床部は掘り窪められ被熱し、長さ137cmの煙道をもつ。床：南壁際にわずかに礫が露出するが、全体的には整地をした様子が窺える。南から北にわずかに傾斜をもつ。壁：壁高15～25cmを測り、緩やかに立ち上がる。ピット：P_2・P_6・P_7・P_9の主柱穴と考えられるピットをはじめ10個検出した。P_8・P_{10}はその位置から補助柱穴と考えるが、主柱穴・補助柱穴とも柱痕は確認できなかった。その他のピットは小礫を多量に含み浅く性格は不明である。覆土：暗褐色土の単層で、全体に拳大～人頭大

の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：黒色土器Aの杯などを若干得ている。

第14号住居址（第11図）

検出：当初西側に設定したB区北端に調査区幅いっぱいに、煙道の先端がわずかに調査区外に延びる形で検出した。規模は7.68m×7.40mを測り、隅丸方形を呈する。カマド：西壁ほぼ中央に芯石と粘土を用いて構築され、53cm×64cmの煙道をもつ。覆土に焼土塊を多量に含み、奥壁・火床はよく被熱している。床：はじめ覆土が全体に堅く黄褐色土塊を混入するため南半部で床を誤認した。黄褐色土を呈し平坦かつ堅緻で東から西にわずかに傾斜する。壁：壁高20～30cmを測り、堅緻で緩やかな立ち上がりを見せる。ピット：主柱穴P_1・P_3・P_4・P_6を含め7個検出している。P_2・P_5は補助柱穴と考える。6個すべてに黒褐色の柱痕が見られ、埋土は暗褐色土であるが混入物は少ない。P_7の性格は不明である。諸施設：南半部の壁際に深さ5cm程度の周溝を確認した。覆土：暗褐色土を基本とするが、上層部で黄褐色土塊を多量に混入するため人為的埋没の可能性がある。遺物出土状況：カマド周辺で高杯など若干の遺物を得ている。

第16号住居址（第13図）

検出：当初西側に設定したB区南端に、西側1/3程度が調査区外で延びる形で検出した。ぶどうの抜根による攪乱を受けるため当初は判然としなかったが、掘り下げの段階で礫と遺物の集中する部分があり、中央を1溝状遺構に切られることを確認した。規模は1辺6.24mを測り、隅丸方形を呈すると思われる。床：小礫を多量に含む起伏のある黄褐色土を呈し、軟弱で北から南にわずかに傾斜する。壁：礫が混じり軟弱で緩やかに立ち上がると思われる。ピット：確認できなかった。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：遺物はほとんど見られない。

第18号住居址（第13図）

検出：溝状遺構の調査のため拡張を行った部分にP161に切られ検出した。規模は3.64m×3.56mを測り、隅丸方形を呈する。カマド：西壁やや南よりに壁を掘り込み構築し、短い煙道をもつ。袖部は芯石と粘土で構築され、覆土中に多量の礫と土器片が混じる。床：黄褐色を呈し、礫を露出させ若干起伏をもつ。壁：壁高32cmを測り、礫を露出するがほぼ直に立ち上がる。ピット：2個検出しており、P_2は黒褐色の柱痕をもつ。対応するものを捕らえられなかったが主柱穴であろう。覆土：壁際で地山と混じる暗黄褐色土となり自然埋没と考える。中央部は暗褐色土で拳大～人頭大の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：カマドとその周辺にまとまって出土している。

第19号住居址（第14図）

検出：同じく溝状遺構の調査のため拡張を行った部分にP165に切られ検出した。規模は5.60m×4.76mを測り、隅丸長方形を呈する。カマド：北壁中央に位置する。袖部の遺存状況は悪いが、奥壁の状況から石組カマドと考える。長さ108cmの煙道をもつ。床：小礫を含む黄褐色土で、中央に向け傾斜をもつ。壁：地山が軟弱で緩やかな傾斜をもって立ち上がる。ピット：主柱穴と考えるP_1～P_4をはじめ7個検出している。主柱穴とP_5には黒褐色の柱痕を確認しており、埋土は黄褐色土粒

をわずかに混入する。覆土：自然埋没を示し、3層に分層できた。壁際のⅢ層は暗黄褐色土で壁が崩落していった様子が窺える。中心部分は暗褐色土で黄褐色土粒と拳大～人頭大礫を混入し、下層になるほど混入物が多くなる傾向にある。遺物出土状況：西壁際中央に土師器の甕が押し潰された状態で出土している。

② 古代

奈良・平安時代に属する竪穴住居址は9軒あり、時期的には8世紀と11世紀の2時期を核に集落が営まれていた。9・10住が比較的大形であるが、1辺4m前後の小規模の住居址が大勢を占め南半部にまとまって位置する。また、内壁を石組で構築し、煙道をもつカマドが遺存状況のよいものだけで2軒（15・19住）確認された。以下、個別に記述する。

第5号住居址（第4図）

検出：当初A区の調査区北西際に設定したトレンチに一部がかかったため、調査区を拡張し調査を行った。規模は5.12m×4.60mを測り隅丸方形を呈する。カマド：西壁中央内側に位置し、ハの字型に広がる粘土で構築された袖と、長さ92cmの煙道を持つ。火床はよく被熱している。床：南半部に小礫が混じるためか黄褐色の粘土を貼っており、平坦で非常に堅緻である。壁：壁高25～30cmを測り、緩やかに立ち上がる。ピット：ピットは4個、主柱穴と考えられるP_1～P_4を検出しており、すべてに黒褐色土の柱痕を確認した。埋土は人為的埋没を示す黄褐色土粒を多量に混入する。諸施設：カマド両脇から西半部に壁構築用と見られる周溝を確認している。また、P_2・P_4間に107cm×94cmを測る用途不明の焼土面を確認した。覆土：自然埋没を示し、暗褐色土を基本とし砂を混入するⅠ・Ⅱ層と壁際の黄褐色土を混入する黒褐色土のⅢ層に分層できる。東半部を中心に拳大の礫の混入が見られる。遺物出土状況：紡錘車・鑿箭式鏃などの鉄製品と土師器の甕を床面から得ている。時期：遺物の様相から見て2～3期（長野県埋蔵文化財センター編年）と考える。

第7号住居址（第6図）

検出：調査区中央西よりの旧B地区との連節部分にP65に切られ検出した。規模は6.08m×5.92mを測り、北東隅がやや張り出す隅丸の不整方形を呈する。カマド：西壁中央内側に芯石に粘土を用い構築され、幅73cm、長さ87cmの煙道をもつ。火床は被熱している。東壁中央にも焼土の広がりが見られ、カマドを造り替えていると考えられる。床：床は色・堅さとも変化が見られないまま黄褐色の混礫層に達してしまい判然としない。壁：壁高40cmを測り礫を多量に混入する。ピット：主柱穴P_1～P_4を含め12個検出している。主柱穴のすべてとP_5に暗褐色または黒褐色の柱痕を確認している。P_5は補助柱穴であろうか。P_{10}は覆土に多量の焼土粒を混入する。柱穴以外のピットの性格は不明である。覆土：黒褐色土の単層で、中央北よりに拳大～人頭大の礫が大量に投げ込まれている。遺物出土状況：前述の礫とともに多量の須恵器・土師器が見られ、埋没過程において投棄さ

れたものと考える。また、覆土下層からは皿状つまみをもつ返りのある須恵器の蓋などが出土している。時期：本址は2期と考える。

第8号住居址（第9図）

検出：調査区中央西よりに7建・P132に切られて検出した。規模は4.44m×4.10mを測り、不整長方形を呈する。64土については掘り下げ段階では確認できず、床面の遺いと断面観察の所見から本址を切ることを確認した。床：南から北に傾斜をもち、黄褐色を呈する。壁：壁高8cmと浅い。覆土：小礫を多量に含む暗褐色土の単層。遺物出土状況：ほとんど無い。時期：2～4期と考える。

第10号住居址（第8図）

検出：調査区中央西よりの旧B地区との連節部分の南に、61土に切られ検出した。規模は6.36m×5.60mを測り、隅丸長方形を呈する。カマド：北東隅の壁内側に位置する。掘り下げの時点ではカマドの位置確認ができず、焼土はほとんど無いが、袖の芯石と見られる内側が被熱した石をカマドとしてとらえた。高架石も落下しているものと見られる。床：黄褐色を呈し平坦かつ堅緻で、礫を抜き取り整地した様子がうかがえる。東から西にむけわずかに傾斜をもつ。壁：壁高は20cmあまりと浅く、礫を露出し緩やかに立ち上がる。ピット：12個検出したが柱痕が確認できたものはない。P_1・P_3・P_4・P_5・P_7・P_{12}などピット内に礫をもつものが多いが、すべて性格は不明である。覆土：暗褐色土の単層で、北東部を中心に拳大～人頭大の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：少ない。時期：出土遺物に13～14期の特徴を見る。

第11号住居址（第9図）

検出：調査区中央やや南よりに8建・P76に切られ検出した。規模は3.56m×3.44mを測り、床面積9.8㎡と今回の調査で最小である。カマド：東壁中央に壁を掘り込み、芯石を粘土で固め袖部を構築している。高架石と見られる偏平な石が3つに割れ周辺に飛散している。内部には橙褐色土が厚く堆積し、須恵器片が多量に混じる。中央部には加工した支脚石が残る。床：小礫を混入する黄褐色土で平坦である。壁：壁高24cmを測り、礫を露出させ緩やかに立ち上がる。ピット：南西隅に性格不明なものを1個検出している。覆土：自然埋没を示す2層が認められ、壁際のII層（暗褐色土）に礫が混じる。大勢を占めるI層は暗黄褐色土で拳大～人頭大の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：南東四半部にほぼ完形の杯が正位に4枚重なった状態で出土しているのをはじめ、カマド南側に集中する。時期：本址は5期に比定される。

第12号住居址（第10図）

検出：調査区中央東際に検出した。規模は3.60m×3.60mを測り、隅丸方形を呈する。カマド：西壁やや南よりに壁を掘り込み、芯石を用い短い袖を構築している。内部に多量の礫と土師器・須恵器片が出土している。床：南から北にわずかに傾斜し、礫を含み黄褐色を呈する。壁：壁高15～25cmを測り、礫を露出する。ピット：5個検出している。いずれも柱痕は確認できず性格は不明である。覆土：覆土が明るくなる壁際に自然埋没の様相を見せるが、中央部は黒褐色土で拳大～人頭大

の礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：カマドとその周辺に有台の杯など集中する。時期：出土遺物の形態から、本址は２期と考える。

第13号住居址（第10図）

検出：調査区南東の突出部北に、25土さらに10建に切られ検出した。規模は4.00m×3.68mと小さく、カマド南が張り出す不整形を呈する。カマド：東壁中央に地山を掘り残し袖部とし、壁を掘り込んで構築している。袖部の先に石を付設し、落下したと思われる高架石を残す。火床はよく被熱している。床：大きな礫を若干残すが、小礫は取り除き整地している様子が窺える。黄褐色を呈し、南から北に向け若干の傾斜を見せる。壁：壁高24cmを測り、礫を混入しほぼ直に立ち上がる。ピット：カマド際に黒褐色の柱痕をもつものを１個検出している。覆土：暗灰色土の単層で、黄色土粒を混入する。遺物出土状況：カマド内から若干の遺物を得ている。時期：１～２期と考える。

第15号住居址（第12図）

検出：調査区南東の突出部南端に大部分を１竪に切られ、一部が調査区外に延びる。当初切り合いを見付けられず１軒の住居址として掘り下げを始めたが、住居址より一回り小さくて深い礫を大量に含む遺構に切られることを確認した。カマド：西壁調査区際に壁を掘り込み短い煙道をもつ。内部は石組で壁を構築しており、火床はよく被熱する。床：礫を混入し判然としない。壁：カマド付近では壁高25cmを測りほぼ直に立ち上がるが、北側は礫の露出を見せ緩やかに立ち上がる。覆土：暗褐色土の単層。１竪とは礫の混入で区別できる。所見：ほとんどの部分を１竪に切られるため判断は難しいが、カマド部分と北側部分は床レベルに25cm程度の開きがある点、壁の状況、カマドの位置など同一遺構と考えるにはやや無理がある。北側部分は本址とは別の遺構と考えるべきであろうか。遺物出土状況：カマド部分に集中して出土している。時期：これらカマドの遺物の様相から１～４期と考える。

第17号住居址（第12図）

検出：調査区南東の張出し部南端に検出した。規模は4.36m×3.30mを測り、隅丸長方形を呈する。カマド：北壁やや東よりの内側に人頭大の礫と土師器片が散乱する被熱部分があり、カマドの痕跡と考える。床：東から西に傾斜をもち、部分的に小礫を露出する範囲があるが、黄褐色を呈し堅緻である。壁：壁高36cmを測り、礫を露出させ緩やかに立ち上がる。ピット：３個検出しているがいずれも性格は不明で柱穴は見当たらない。覆土：黒褐色ないし暗褐色を呈す。東半部を中心に、下層に礫の投げ込みが見られる。遺物出土状況：北東隅に若干出土を見た。時期：４期と考える。

(2) 竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第12図）

検出：調査区南端に15住を切る状況で検出された。規模は3.96m×4.12mを測る隅丸方形を呈する。床：軟弱で小礫が少量混入する褐色土を呈する。壁：壁高40～50cmを測りほぼ直に立上がる。

ピット：床面中央やや東側と西端中央付近に２個検出している。覆土：１層のみの堆積である。上面から床面まで拳大の礫が多量に混入している。礫以外では、須恵器・土師器・刀子などが出土しているがいずれも覆土上層から出土している。覆土下層からは寛永通宝が出土しているため、本址の時期は近世の可能性が高い。

(3) 掘立柱建物址

掘立柱建物址は11棟（２～12建）検出している。柱配置は２間×２間の総柱式が３棟ある他は、２間×２間ないしは３間×３間の側柱式がほとんどである。特異なものとしては９建があるが、切り合いの可能性も考えて調査したが、最終的には２間×３間の側柱式の東西両側に庇がつくものとした。出土遺物から時期が特定できた建物址は１棟のみである。以下、個別に記述する。

第２号建物址（第15図）

検出：調査区北端に一部が調査区外に延びる形で検出した。柱配置：東西方向２間の総柱式で規模は4.5ｍを測る。柱穴：柱穴の平面規模は１ｍ前後と大きく平面楕円形ないしは円形を呈し、すべてに黒褐色の柱痕を残す。埋土は暗褐色土でほとんどの柱穴に人為埋没を示す黄褐色土塊の混入が見られ堅い。遺物出土状況：土師器の杯を得ている。時期：出土遺物から11～15期と考える。

第３号建物址（第15図）

検出：調査区北端に30土を切る形で検出した。柱配置：２間×２間の総柱式で方形を呈する。規模は4.8ｍ×4.5ｍを測り、柱間は2.2ｍ前後と比較的一定している。柱穴：掘り方は平面楕円形ないしは円形を呈し、黒褐色ないし暗褐色の柱痕をもつ。本址も柱穴の規模が大きく柱痕の残りも良好で、P_1・P_5・P_8で複数見られること、埋土が複雑なことから同位置で建替えが行われている可能性もある。埋土は基本的に堅くしまった黒褐色・暗褐色土中に黄褐色土塊を多量に混入する人為埋没である。

第４号建物址（第16図）

検出：調査区北側２建の東に南側柱列をおよそ１/２ずつ検出し、残りを調査区外に延ばす。柱配置：様式・規模とも不明といわざるを得ない。柱穴：P_1・P_3に黒褐色に柱痕を確認している。埋土は残存部分で見る限り黒褐色・暗褐色土中に黄褐色土塊を多量に混入する人為埋没である。所見：ごく一部の調査に止まったため推定の域を出ないが、柱穴の平面規模および柱痕・埋土の様相は前述の２・３建とよく似た状況を示しており、位置的にも近接することから同様の２間×２間の総柱式建物の存在を考えたい。

第５号建物址（第16図）

検出：調査区東よりで６住の東に検出した。柱配置：２間×２間の側柱式で長方形を呈する。規模は3.8ｍ×3.2ｍを測り、柱間は桁行1.6～1.9ｍ、梁行1.5～1.6ｍを測る。柱穴：掘り方は平面円

形ないし楕円形で、全体的に残存状況が悪くP_4・P_6で柱痕を確認したに止まった。埋土は締まりが悪く、礫を混入する暗褐色土である。

第6号建物址（第16図）

検出：調査区中央東際、9住北に検出した。柱配置：2間×2間の総柱式で方形を呈する。規模は3.2m×3.0mを測り、柱間は桁行1.4～1.6m、梁行1.3～1.7mを測る。柱穴：西側列でとくに残りがよく、平面円形ないし楕円形ですべてに黒褐色の柱痕を確認している。埋土は礫が混入するため締まりが悪い暗褐色土である。

第7号建物址（第17図）

検出：調査区中央に8住を切る形で検出した。柱配置：3間×3間の側柱式で長方形を呈する。規模は4.9m×3.8mを測り、柱間は桁行1.3～1.9m、梁行1.1～1.4mを測る。。柱穴：平面円形ないし楕円形で北側柱列の4個以外で黒褐色の柱痕を確認している。埋土は礫を混入する暗褐色土で締まりが悪い。

第8号建物址（第17図）

検出：調査区中央に11住を切る形で検出した。柱配置：2間×2間の側柱式で方形を呈する。規模は4.2m×4.1mを測り、柱間は桁行1.3～2.5m、梁行1.8～2.1mとかなりバラつきがある。柱穴：平面円形ないし楕円形でP_6がやや浅いが、残存状況はよくすべてに黒褐色の柱痕を確認している。埋土は礫を含む暗褐色土で締まりが悪い。

第9号建物址（第18図）

検出：調査区南よりの東際、13住の北に検出した。柱配置：基本的には3間×2間の側柱式建物の東西両側に庇がつくものと考えた。東側には入口など何らかの施設を設けていたようで西側柱列と柱間が合わず3間となる。規模は主屋部で5.1m×3.6mを測り、西側庇部2.0～2.5m、東側庇部1.0～1.5mを測る。長方形を呈するが柱間は一定しておらず、とくに庇部においてバラつきが見られる。柱穴：平面円形ないし楕円形で、すべてに黒褐色の柱痕を確認している。底部に5～10cm大の礫を露出させているものが多く、埋土は暗褐色土で礫を混入する。

第10号建物址（第19図）

検出：調査区南側に13住・25土を切り、P143に切られて検出した。柱配置：2間×2間の側柱式で方形を呈する。規模は4.8m×4.6mを測り、柱間は2.2mとほぼ一定している。柱穴：平面形はほとんどが円形を呈し、P_2・P_7・P_8以外は黒褐色の柱痕をもつ。P_3・P_4・P_5・P_6は底面に礫を露出させ、埋土は暗褐色土である。

第11号建物址（第19図）

検出：調査区西南隅の礫中に検出した。柱配置：2間×2間の側柱式で長方形を呈する。規模は3.9m×3.1mと今回の調査遺構中最小で、柱間は桁行1.7～2.1m、梁行1.3～1.8mを測る。柱痕：平面楕円形を呈するものがほとんどで、すべてに黒褐色の柱痕を確認した。埋土は礫と黄褐色土粒

を混入する暗褐色土である。

第12号建物址（第18図）

検出：調査区南東の突出部、15住の北に63土・５墓に切られて検出した。柱配置：梁方向の柱列で中間の柱穴をそれぞれ63土、５墓に切られているものと思われ、２間×２間の方形を呈する側柱式建物と考えた。規模は3.8m×3.6mを測り、柱間にはややバラつきが見られる。柱穴：掘下げ手順を誤ったP_4を除くすべてに黒褐色の柱痕を確認した。埋土は明黄褐色土ないし黄褐色土粒を混入する暗褐色土で人為埋没と考える。

(4) 墓址（第21図）

今回の調査で墓址として扱ったものは５基ある。このうち人骨と確認できたものは２・５墓の２基で、３墓はイヌ、４墓はシカで、１墓は骨粉状態で骨種の特定はできなかった。位置的には１墓を除き調査区南東の突出部にまとまっており、時期的には５墓が出土銭から近世の遺構と考えられるほかは不明である。以下個別に記述する。

第１号墓址

検出：調査区中央東より、８住の北に検出した。規模：長径160cm×短径110cmを測り東西に長く、北側に56cmの張り出し部がつく不整形を呈する。検出面からの深さは12cmと浅く、底面は平坦である。覆土：炭化物と骨片が混じる暗褐色土で、張り出し部がつく平面形から火葬墓と考えられる。

第２号墓址

検出：調査区南より、10建の西に検出した。規模：長径80cm×短径52cmを測り、平面楕円形を呈する。主軸をほぼ南北方向にとり断面半円形を呈し、検出面からの深さは最大26cmを測る。覆土：黒褐色土で礫と炭化物が混じる。遺物出土状況：人骨１体が出土した。北端の径26cm大の礫下に頭部を置いたらしく歯が並び、南に大腿骨等が重なり合ってあり、土葬墓と考える。所見：上・下顎骨の骨体の一部と植立する歯が存在する。大腿骨、脛骨の骨体の中央部が主に残り、他の部分の骨はすべて崩壊する。歯のへり方は強度である。長骨の骨壁は厚く、形態はかなり頑丈といえる。強壮な体格を有する男性人骨で、年齢も熟年（40歳以降）のものと推定される。

第３号墓址

検出：調査区南より、13住の北西に検出した。規模：長径74cm×短径40cmを測り、隅丸長方形を呈する。断面は逆台形で、検出面からの深さ24cmを測る。覆土：暗褐色土で黄褐色土粒が混じる。遺物出土状況：シカ１頭分の骨が出土している。所見：全身の多くの骨が残存するが、ほとんどが骨端を欠き、指骨などの細かな骨は見当たらない。

第４号墓址

検出：調査区南より、13住の西に上部に大きな石をともなって検出した。規模：長径54cm×短径

38cmと小さく、平面楕円形を呈する。断面は半円形を呈し、検出面からの深さ14cmを測る。遺物出土状況：石の下に頭部を置く形でイヌ１頭分の骨が出土している。所見：１頭分の全身骨格がほぼ残存する。欠矢部位もあるが、頭骨の微細な箇所も保存され、比較的新しい時代のイヌであろうか。歯の大きさなどから中型犬と推定される。

第５号墓址

検出：調査区南東の突出部に12建を切る形で検出した。規模：長径109cm×短径78cmを測り、平面不整楕円形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。覆土：２層に分層した。第Ⅰ層は黒褐色土、第Ⅱ層は暗褐色土である。土葬墓と考えられる。遺物出土状況：頭骨をよく残す人骨１体が出土している。人骨は第Ⅱ層中にあり、頭部上の第Ⅰ層に38cm×29cmの大きな石がのる。底面には５枚の寛永通宝と１枚の永楽通宝があり六道銭と考えられる。所見：前頭骨や下顎骨の保存がよい。四肢骨は多くが崩壊する。下顎の大臼歯のほとんどが生前に脱落し、歯槽が閉鎖している。頭骨はかなりきゃしゃな形態を示し、四肢骨の骨壁も薄く、壮年期以降の女性人骨を推定させる。時期：出土銭から17世紀末以降の近世の墓址と考える。

(5) 土坑・ピット（第21図）

今回の調査では土坑40個、ピット118個を検出したが、性格や時期を把握できたものは少ない。土坑・ピットの区別は、長径概ね50cmを超えるものを土坑とし、それ以下のものをピットとした。遺物をもつもの、特殊な土坑を以下に記述しておく。

第27号土坑

検出：当初西側に設定したＢ区北端、14住の南に検出した。規模：長径100cm×短径54cmを測り、平面不整形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。覆土：黄褐色土粒を混入する暗褐色土で、西側部分に黄褐色土がブロック状に混入する箇所があり人為埋没の可能性がある。

第34号土坑

検出：調査区中央東より、９住の南西に検出した。規模：長径60cm×短径50cmを測り、平面楕円形を呈する。検出面からの深さは北西側で22cmを測り、南東側は10cm程度と浅くなる。覆土：中央部に径25cm程度の黒褐色の柱痕と思われる土層が確認された。しかし、周囲に本址とともに建物址等の遺構を形成すると考えられる土坑・ピット等は確認できなかったので土坑として扱った。埋土は黄褐色土塊を混入する暗褐色土で人為的埋没と考える。

第61号土坑

検出：調査区中央に10住を切る形で検出した。規模：長径123cm×短径84cmを測り、平面楕円形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。覆土：暗褐色土で下層に10～40cm

大の礫を多量に混入する。遺物出土状況：礫の中に土師器の杯など若干の遺物をもつ。時期：不明である。

第62号土坑

検出：調査区中央、7住の南に検出した。規模：検出面では径120cmの円形で、断面は巾着状を呈し胴部の最大径は146cm、検出面からの深さは60cmを測る。覆土：4層に分層した。上層で黄色土粒をわずかに混入し、下層ほど暗色を呈する。

(6) 溝状遺構

第1号溝状遺構（第20図）

検出：調査区南東の突出部南端に16住を切って検出された。規模：西側は調査区外に延びており、長径440cm×短径360cm×深さ40cmを測る。覆土：1層で、拳大～人頭大の礫が多量に混入している。遺物出土状況：下面からは、まとまった量の土器（土師器杯・高杯・甕、須恵器甕）とともに馬の歯と考えられる骨類が出土した。時期：16住を切ることと遺物から7世紀後半と考えられる。

第3節　遺　物

(1)　土器(第22～27図)

各遺構より出土した土器類は整理復原の結果91個体を図示するに至った。これらは古墳時代後期末～平安時代に渡り、集落の営まれた時間を示している。ここでは先学による土器の編年研究の成果、古墳時代後期については直井雅尚による千鹿頭北遺跡出土土器の分析（松本市文化財調査報告69『松本市千鹿頭北遺跡』松本市教育委員会1989)、奈良・平安時代については長野県埋蔵文化財センターによる土器編年（『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 ― 松本市内その1 ― 総論編』長野県埋蔵文化財センター1990）に従い、時代、遺構毎に遺物の概要を記したい。なお記述中で用いた器種・器形の呼称、分類については長野県埋蔵文化財センターのものに拠った。

①　古墳時代後期の土器

本時期に帰属する遺構は住居址5軒、溝状遺構1基があげられる。36点を図化呈示した。

第8号住居址(22～33)

土師器高杯(23～25)・小型甕A(30)・甕A(27・32・33)・甕F(26)、須恵器杯D(22)・甕(31)等がある。土師器高杯の杯部は杯Dの形態で、内面黒色処理を行う。須恵器杯Dは底部ヘラ切り後わずかに周囲を削るものの、ほとんど未調整のままである。土師器甕はゆるく体部中位が張る形態(32)と体部上位に最大径を有する形態(33)がある。

第9号住居址(34～36)

出土数は少ない。土師器杯D(34)・高杯(35)・甕F(36)がある。杯・高杯は内外面ミガキ、内面黒色処理を行う。

第14号住居址(67～69)

わずかに3点を図示できたのみである。土師器高杯(68・69)・甕A？(67)がある。高杯は杯Dの形態(68)と肩部に稜を有する杯Fの形態(69)がみられ、後者は口縁部を内傾させ深い。いずれも内面黒色処理を施す。

第18号住居址(76～79)

4点を図示した。土師器高杯(78)・小型甕A(79)・甕A(76・77)が存在する。高杯は杯Dの形態である。甕Aは体部中位がゆるく張るもの(77)と体部上位が張るもの(76)がある。

第19号住居址(70～73)

土師器杯D(71)・高杯(72)・甕A(70・73)が図示できた。杯は内外ミガキ調整、内面黒色処理を行う。土師器甕は器体中位がゆるく張り出す。

第1号溝状遺構(80～89)

当該期の遺構の中では量的に豊富である。土師器杯F(82)・高杯(80・81)・小型甕A(85)・甕A(83・84・87・88)・甕B(86)、須恵器甕(89)が存在する。土師器杯はいわゆる有稜の形態で、直立する口縁部、平底気味の底部を有する。高杯は稜を有さない杯Dの形態である。甕はいずれも体部中位が張り出す形態である。

まとめ

最後に各遺構出土土器の編年上の位置付けを行っておきたい。全体に資料の少ない中、須恵器、土師器杯・甕のあり方に着目すると、全体的に次の点を指摘することができよう。

a　食膳具に占める須恵器の割合が極めて低く、6住の杯Dを除き出土が見られない。特に次の奈良時代に盛行する杯A・Cを欠如している。

b　土師器杯類は高杯も含めほとんどが肩部に稜を有さない椀形の形態で、有稜杯(高杯)は第14号住居址と第1号溝状遺構に見られるのみである。

c　土師器甕、特に長胴甕についてはハケ調整を行うものが皆無に等しく、器面を工具によりナデ調整するものばかりである。その形態は口縁部をくの字状にやや長めに外反させる。体部は中位が明瞭に張るもの、弱く張るもの、上位が張りだすものの3形態が見られる。

これを直井雅尚が行った千鹿頭北遺跡出土土器の編年観に照らすと、aの事実からみて須恵器杯Aや杯蓋Bを伴う4段階に下る可能性は薄く、bのあり方から有稜杯の繁出する1段階以前の様相も看取されない。従って今回出土した土器群についてはおおむね千鹿頭北遺跡1～3段階に併行するものと受け取ることができる。

次に各遺構間の時期差であるが、長胴甕のあり方でみると、第1号溝状遺構出土品はいずれも体部中位の張りが明瞭であるのに対し、6・18・19住では張りが弱く、さらに6・18住では器体上位に最大径を有する個体が伴っている。この差異を時間差によるものとみなし各段階に当てはめるなら、第1号溝状遺構は有稜杯が伴うことと合わせ千鹿頭北遺跡1段階に、第6・18・19住出土品は千鹿頭北遺跡2～3段階となろう。他の遺構についても、時期決定となる根拠に乏しいが、上記b・cのあり方から見て千鹿頭北遺跡2～3段階に併行するものと考えたい。年代的にこれらは古墳時代後期末、7世紀後半頃に位置しよう。

② 奈良・平安時代の土器

住居址9軒、建物址、土坑等より本期の遺物を出土し、55点を図示し得た。

第5号住居址(1～4)

土師器甕A(3)、須恵器杯A(1・2)・長頸壺B(4)がある。土師器甕は比較的薄手で明瞭な平底をなす。須恵器杯(1)は底部ヘラ切りである。本土器群は長野県埋蔵文化財センター編年(以下同)2～3期の様相を呈する。

第7号住居址(8～21)

土師器甕A(17)・甕B(18・20)・甕F(19・21)、須恵器杯蓋A(10)・杯蓋B(9)・杯A(11～13)・

高盤(16)・椀(14)・短頸壺(15)・壺蓋(8)がある。須恵器杯蓋A(10)は大形品で、皿状のつまみを付す。内面の返りは鈍く痕跡的である。須恵器杯A(11)は底部ヘラ切り未調整である。以上の様相は2期の特徴を示している。

第8号住居址(5)

須恵器杯A(5)1点を図示し得たのみである。底部切り離しはヘラ切りによる。その特徴は2～4期の特徴を示す。

第10号住居址(6・7)

出土数はわずかである。土師器杯A(6・7)を図示し得た。いずれも底部切り離しは回転糸切りにより、その形態、法量は13～14期の特徴を示す。

第11号住居址(37～49)

遺物量は多い。黒色土器A杯A(44)、土師器甕(49)、須恵器杯A(38～43)・杯B(37・45)・短頸壺(46・47)・甕(48)がある。黒色土器A杯A、須恵器杯Aはいずれも底部に回転糸切り痕を残す。40の体部には墨書がみられる。土師器甕は当該期に通有のロクロ調整やハケ調整のものと異なり、長胴の甕Bの器高を縮小したような特異な形態である。本土器群は器種・器形、組成からみて5期の様相に比定される。

第12号住居址(50～57)

土師器甕A(57)・甕G(56)・鉢(55)・須恵器杯A(50・52)・杯B(51)・短頸壺(53)・甕(54)がある。52は混入品と考えられる。須恵器杯A(50)は底部回転ヘラ切りで、盤状の形態を呈する。これらの土器群は2期の様相を呈する。

第13号住居址(58～60)

土師器甕B(58～60)のみ存在する。その特徴は1～2期の様相を呈する。

第15号住居址(74・75)

土師器甕(75)、須恵器杯A(74)が存在する。杯Aは底部ヘラ切りである。土師器甕はくの字状の外反口縁、ゆるく上位の張る体部、丸底を有し、体部内外には密なハケ調整を行い薄手に仕上げる。胎土も精良で赤色粒子を含み、堅緻な焼成である。その特徴は在地の甕とは異なり、おそらく東海・関西地方よりもたらされたものと推測される。須恵器杯は1～4期に見られるものである。

第17号住居址(61～66)

黒色土器A杯蓋(61)・小型甕D(65)、須恵器杯A(62～64)・長頸壺A(66)が図化できた。土師器杯蓋は須恵器杯蓋Aと製作手法が同一で、内面にミガキと黒色処理を行う点で異なる。須恵器杯Aは62・63が回転糸切り、64はヘラ切りである。これらの土器群は4期の様相を呈している。

建物址(90)

第2号建物址より土師器杯A(90)が出土している。11～15期に帰属するものである。

土　坑(91)

第１号土坑より土師器甕Ｂ(91)が出土している。３～４期に帰属するものである。

(2) 金属製品(第28図)

金属製品は鉄器と鉄滓、銭の出土を見ている。鉄器は馬具の留金具や紡錘車が良好な状態で出土している。ただ、総体的には鉄分の残存度は悪く非常に脆い。銭はすべて中・近世の遺構からの出土である。以下、種類別に概観する。

① 鉄製品

刀子（２～４）　刀子は３点出土している。８住出土の２は茎部を一部欠いている。身部長は132㎜、幅13㎜を測り、棟関を持つ。刃部は棟部分の厚みに比して幅が狭く、かなり使用減りしているものと考えられる。１竪出土の３は明瞭な両関をもち、両端と関際の刃部をわずかに欠いている。刃部が関際から内湾するように減幅しているのは研磨減りのためであろうか。同じく１竪出土の４は身部の先端を残すのみだが、残存部における幅は他に比して広く16㎜を測り、棟厚は２㎜と薄い。

鏃（５～７）　鏃は３点出土している。５住出土の６はほぼ完形の「鑿箭式」で、茎部の端をわずかに欠く。身部は錆膨れにより判別しにくいが片丸造の断面で蛇頭状を呈する。篦被部は64㎜と長く、両関をもつと思われるが明瞭ではない。同じく５住出土の５は頸部の長い片丸造の「鑿箭式」で篦被から先を欠く。６に比べ身部が４㎜と薄く篦被部は残存長約70㎜とさらに長い。25土出土の７は「斧箭式」で鏃身部を残すのみである。身部幅10㎜、残存長は53㎜を測る。身部厚は残存中央部で３㎜を測り、先端に刃部をもつ。残存部分から篦被をもたず頸部に移行するものと思われる。

紡錘車（１）　５住から１点出土している。残存長174㎜で紡軸の糸繰り側はほぼ完形で、時計方向の糸繰痕を残す。紡輪部は断面円形で径51㎜、中央厚11㎜、縁厚２～３㎜を測る。このほか不明品とした中に軸部の可能性があるものが１点ある。

馬具（８）　７住から革帯の交差部分を連結する留金具が出土している。３か所に穿穴をもち表側の鋲の頭隠しのため凹ませている。裏側は１か所脚の痕跡らしく突出する部分があるが錆ぶくれのためはっきりしない。住居址からの馬具の出土は珍しく、松本市内の古墳時代後期においては平畑遺跡の杏葉（未報告）に続いて２例目である。

不明品（９～12）　５住出土の９は残存部分で１辺４～５㎜の隅丸方形の断面をもつ棒状を呈し、両端を欠く。５住からは前述の紡錘車の出土を見ており、紡軸の可能性も考えられる。10・11・12は１竪から一括で出土しており、同一種と考えられるが接点はなく別個体のようである。３～５㎜の径をもつ断面円形の棒状を呈す。10は尖端部を残し他端を欠く。11は両端を欠いているが10同様片端に向い径が細まり尖端を有していたと考えられる。12は径は３㎜程度でほぼ一定しており片端を欠く。もう１点同じく１竪出土の幅５㎜、厚１～３㎜程度の板状を呈し、片端を欠く鉄製品があるが、全体的に剥離が著しく器種は不明である。

なお、7住・10住から各1点、61土坑からは2点、総量にして89.26gの鉄滓が出土している。

②銭貨

1竪から1枚、5墓址から6枚、60土坑から1枚の合計8枚の出土をみている。5墓址からの内訳は「寛永通宝」が5枚、「永楽通宝」(6)は字体から模鋳銭と考える。「寛永通宝」はうち4枚(1・2・3・5)までが新寛永銭といわれる「文銭」(寛文亀井戸銭)であるが、4枚とも微妙に字体は異なる。残る1枚(4)は錆による腐食が著しく「通」字と「寶」字の一部が剥落しているが、いわゆるス寶で「元禄京都銭」であろうか。1竪出土の「寛永通宝」もス寶が確認でき4同様「元禄京都銭」と考える。また、60土坑からは宋銭の「熙寧元宝」が出土している。

参考文献

亀田一恕・中川近禮・榎本文城編『新撰寛永泉譜　前編』　出版年不明　考古堂

(3)　石器(第28図)

本遺跡からは縄文時代と奈良・平安時代の定形的な石器が出土している。縄文時代の石器は石鏃1点のみである。第9号住居址からの出土であり混入品と考えられる。　奈良・平安時代の石器としては、砥石・こもで石が第7号住居址から出土している。

①石鏃

黒曜石を石材に利用した凹基の無茎鏃である。側縁の形状は内彎している。破損状況についてみると、片脚がわずかに欠けている。長さは2.45cm、残存部の最大幅は1.40cm、厚さは0.44cmを測り、重量は0.93gである。

②砥石

1点が出土している。片側を破損しており、残存する寸法は最大長18.44cm、最大幅4.73cm、最大厚3.10cmを測る。4面に研いだ痕跡が認められる。

③こもで石

第7号住居址の北東隅床面上から5個まとまった形で出土したもので、編物用のこもで石として取り上げた。これは長さ3～11cm、幅3～6cm、厚さ2～5cmの自然礫で、平面形が円形のものと長楕円形を呈するものがある。組み掛けなどの加工は認められなかった。

(4)　土製品(第28図)

紡錘車(1)は、今回の調査で確認された唯一の土製品である。第19号住居址の覆土中より出土した。1/4程が残存する破片である。推定寸法は最大径7.0cm、高さ3.6cm、孔径は0.7cmで、断面は台形を呈する。調整は、全体にナデ調整が行われ、全体に丸みを帯びている。所属時期は、伴出した土器群などから古墳時代後期と考えられる。

第４章　調査のまとめ

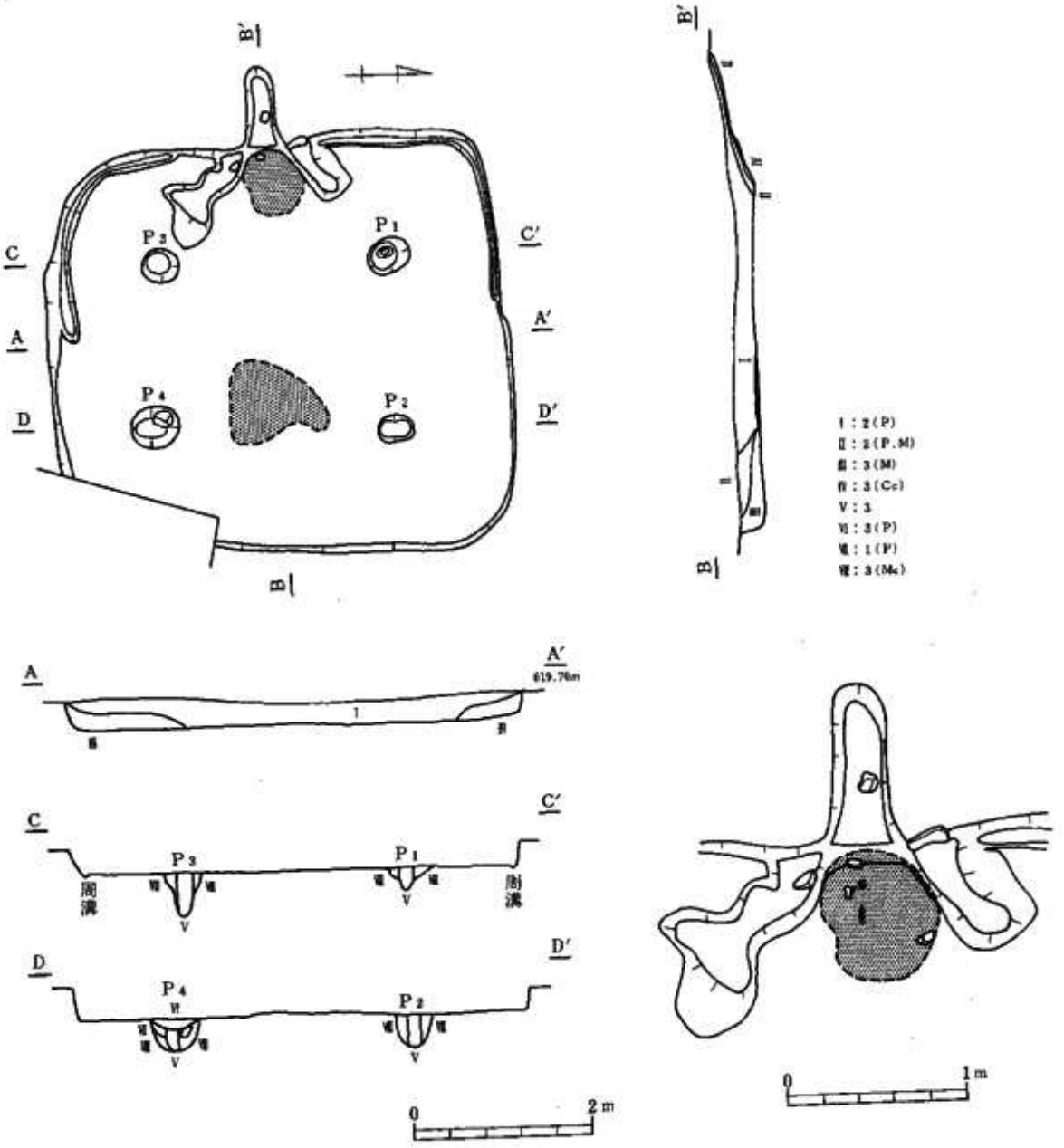
今回の調査では、下原遺跡は７世紀後半（古墳時代末）から８世紀前半（奈良時代）を主とする集落址であることが判明した。下原遺跡第１次調査で検出されている住居址と、ほぼ同時期にあたり、山辺中学校付近までは同一様相を呈して広がりをみせていると考えられる。本調査地の遺構分布をみると、調査区中央に東西方向に走る微高地上を中心に遺構が分布することが窺える。以下、遺構・遺物についての特徴を考えてみたい。

遺構　住居址は、計19軒検出している。規模は４～６ｍのものが多くみられるが、14住のように一辺7.68～7.40ｍを測る大形の住居址もみられる。カマドは、東壁４軒・西壁７軒・北壁２軒・不明２軒で東西方向のどちらかに位置する例が多い。これは、松本平における古代の住居址の一般的な傾向といえる。

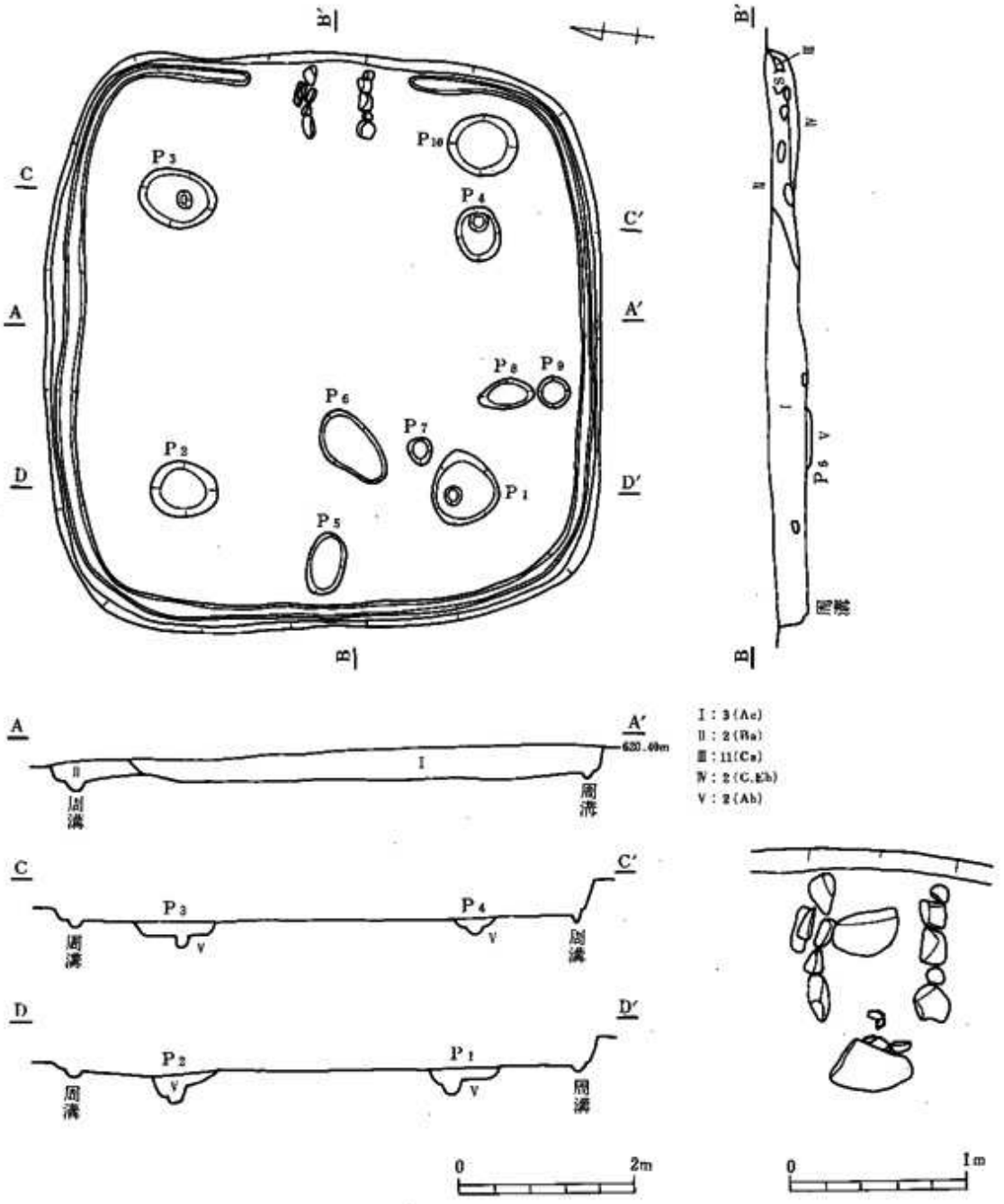
掘立柱建物址は、計11棟検出している。調査区北端には、掘り方の計が24～116cmを測る大形の建物址が検出されている。ピット覆土中から出土した土器片から、古墳時代末に比定されるものと推定される。その他の建物址については、掘り方・柱痕ともに小さいことや出土遺物などから奈良から平安時代にかけての時期が考えられる。

遺物　出土した遺物は、古墳時代末～奈良時代（７ｃ後半から８ｃ前半）にかけての土器が主体である。７ｃ後半の土器群では、食膳具における須恵器の割合が少なく土師器主体で煮炊具の割合が大きい。特殊品としては、東信地方から群馬県地方にかけてみられる皿状つまみのかえりのある須恵器蓋が出土している。

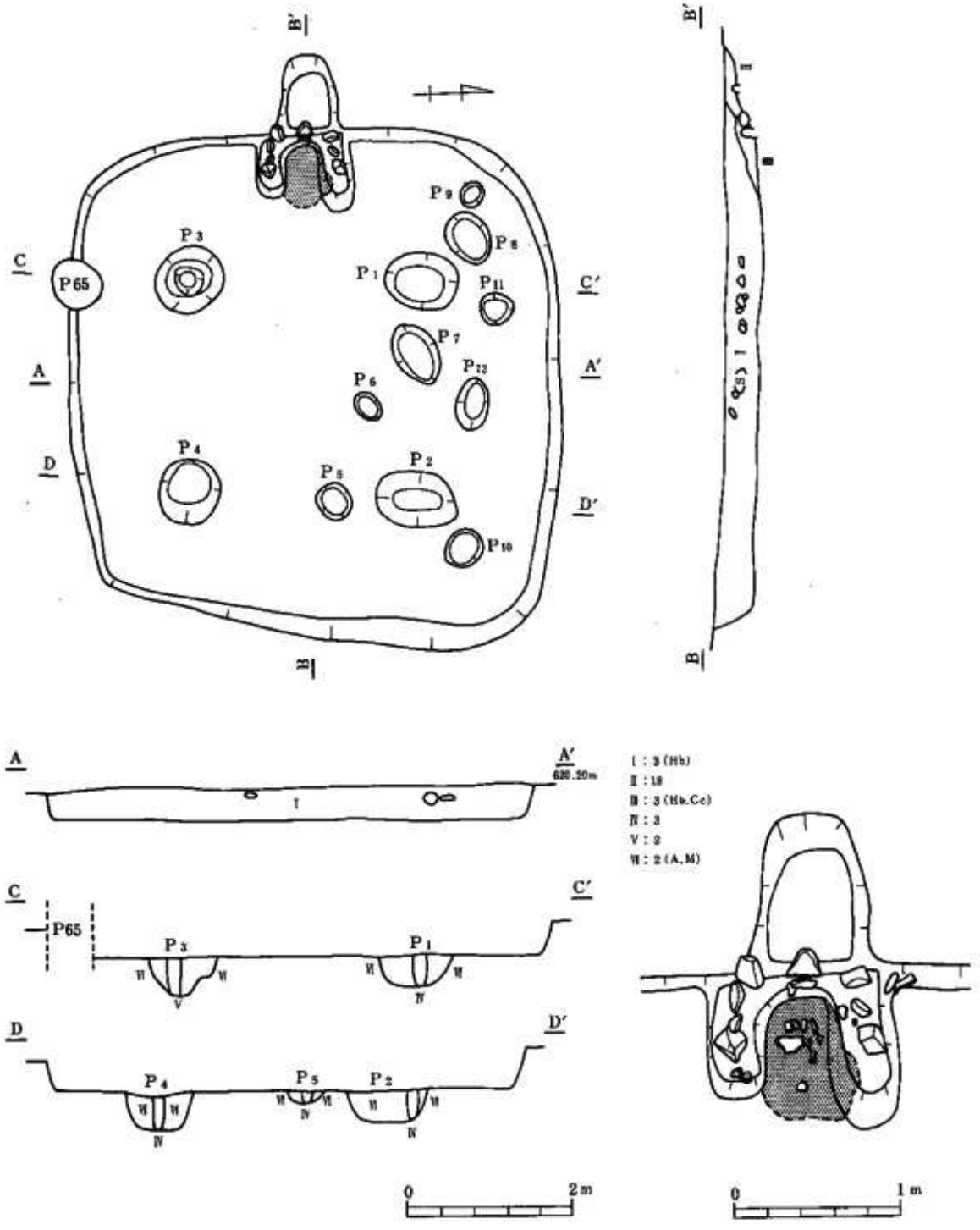
本遺跡が立地する山辺谷には、５～７世紀にかけての古墳が点在している。現時点では、これらの古墳の背景となるような集落はほとんど見つかっていない。近在の周知の集落遺跡としては、薄川右岸の千鹿頭北遺跡（前期～後期）、左岸の堀の内遺跡（前期～後期）、鎌田遺跡（中期）、県町遺跡（中期末～後期初頭）があげられる。これらの遺跡の傾向としては、古墳時代を通して継続して営まれた集落であるといえよう。しかし、下原遺跡はこれらの遺跡と違い７世紀後半に突然出現する比較的規模の大きな集落である。歴史的な背景を考えてみると、『日本書記』天武天皇14年（685）10月の条に「壬午、遣軽部朝臣足瀬、高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃令造行宮、蓋擬華東間温湯歟」と郡内に行宮がつくられたことを示唆している記述がみられる。東間温湯は、下原遺跡近隣の松本市浅間温泉もしくは湯の原温泉と考えられている。これらのことも考え、今後は遺跡の範囲、他遺跡の遺構・遺物なども検討して注目していく必要があろう。


B'
B
C
C'
A
A'
D
D'
P1
P2
P3
P4
I : 2(P)
II : 2(P.M)
III : 3(M)
IV : 3(Cc)
V : 3
VI : 3(P)
VII : 1(P)
VIII : 3(Mc)
619.76m
周溝
0
2m
1m

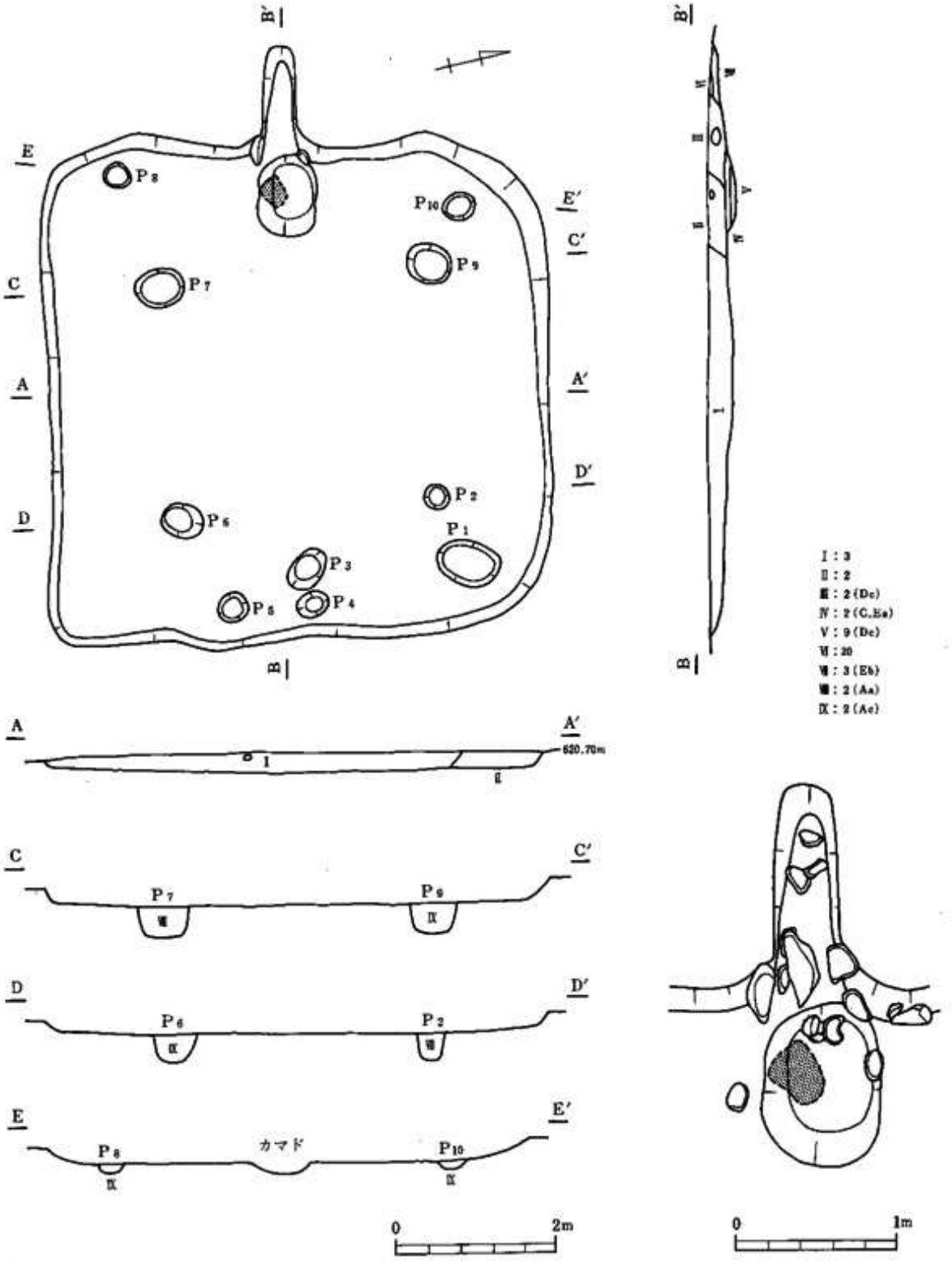
第4図　第5号住居址


B'
B
C
C'
A
A'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
周溝
630.40m
I : 3 (Ac)
II : 2 (Ra)
III : 11 (Cs)
IV : 2 (C.Eh)
V : 2 (Ah)
0
2m
1m

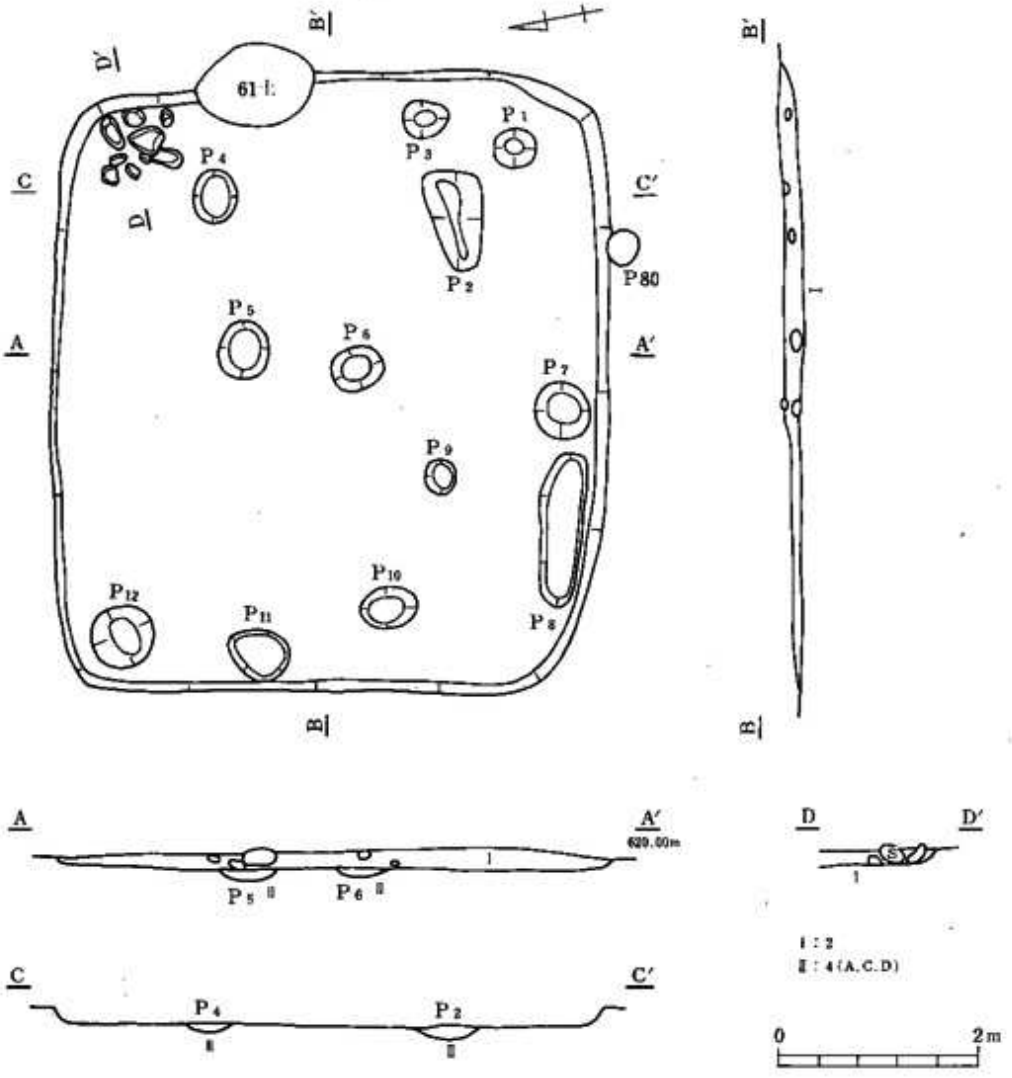
第5図　第6号住居址


B'
B
A
A'
C
C'
D
D'
P65
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
620.20m
I : 3 (Hb)
II : 18
III : 3 (Hb.Cc)
IV : 3
V : 2
VI : 2 (A.M)
0
2m
1m

第6図　第7号住居址

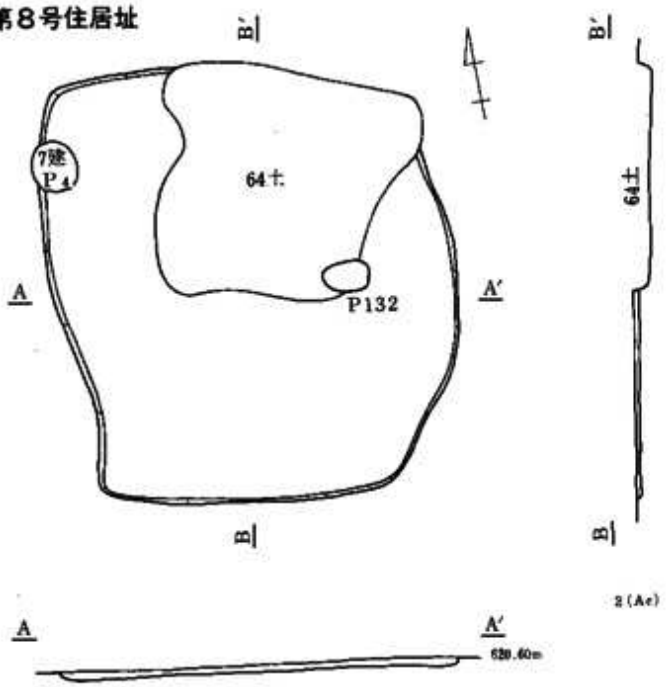

B'
B
E
E'
C
C'
A
A'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
I : 3
II : 2
III : 2 (Dc)
IV : 2 (C.Ea)
V : 9 (Dc)
VI : 20
VII : 3 (Eb)
VIII : 2 (Aa)
IX : 2 (Ac)
620.70m
カマド
0
2m
1m

第7図　第9号住居址

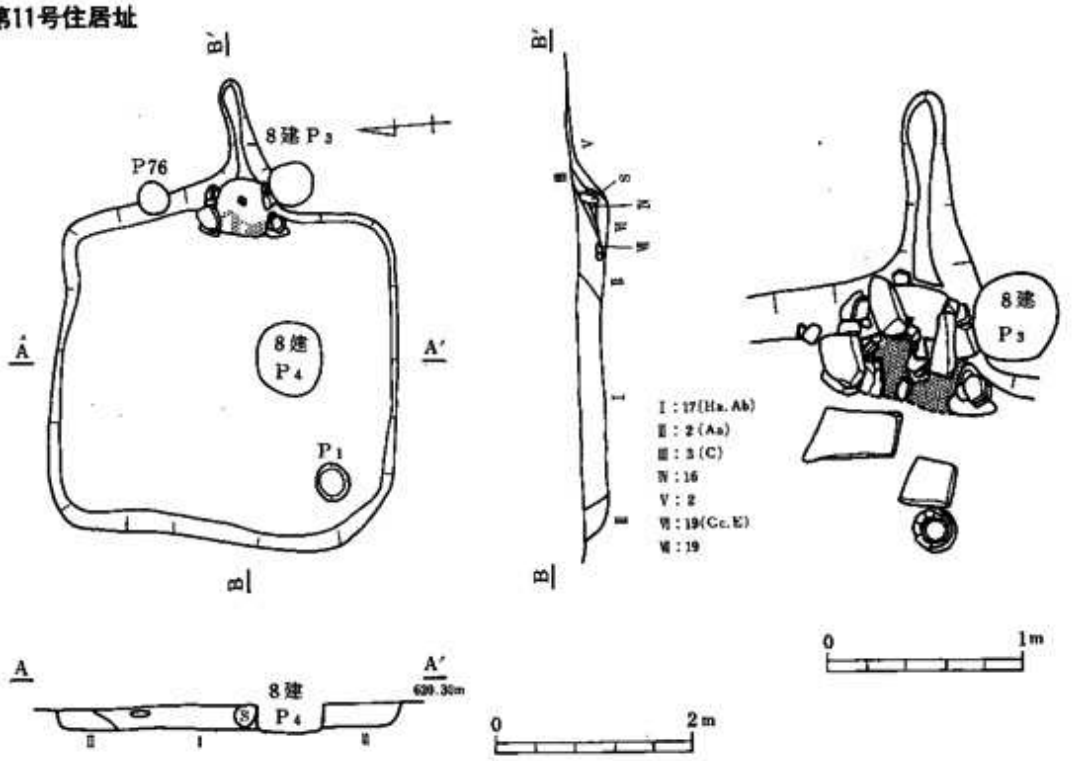

B'
D'
61
P1
P3
P4
C
C'
D
P2
P80
P5
P6
A
A'
P7
P9
P10
P12
P11
P8
B
B'
A
A'
620.00m
P5
P6
D
D'
S
C
C'
P4
P2
I : 2
II : 4 (A.C.D)
0
2m

第8図　第10号住居址

第８号住居址

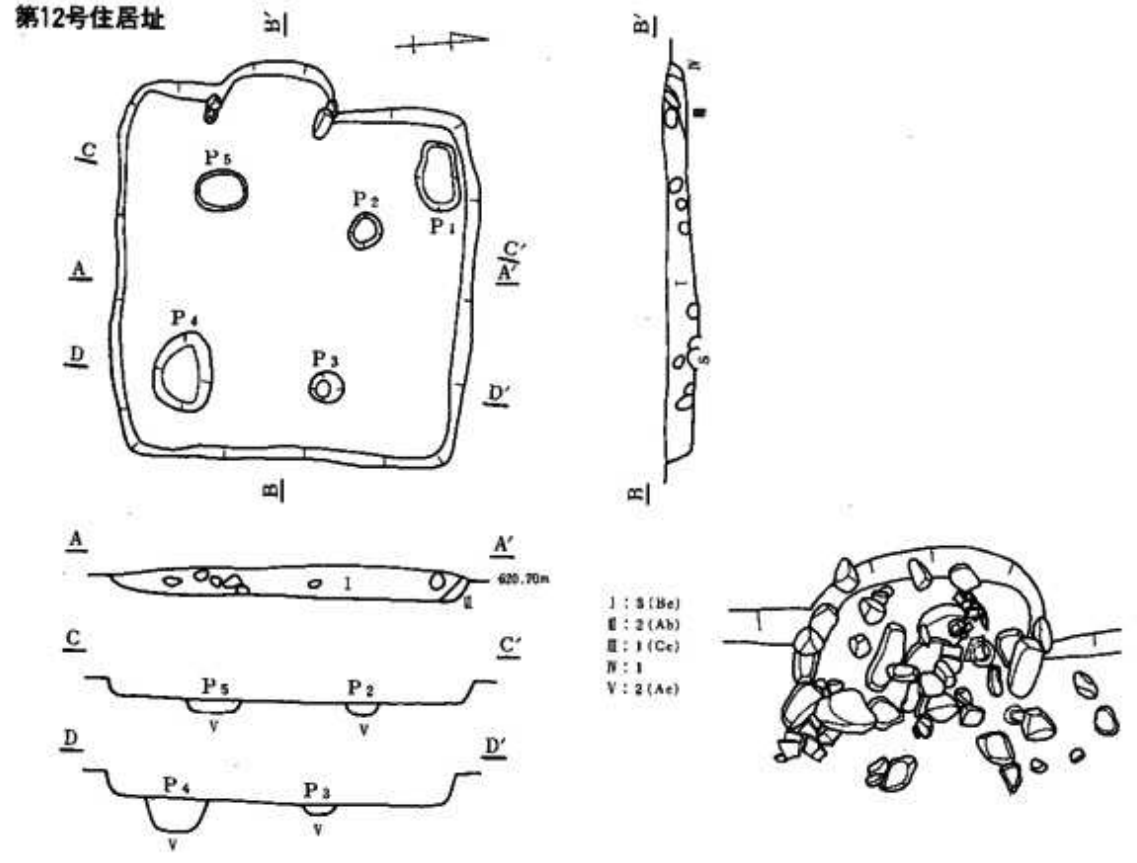


第11号住居址

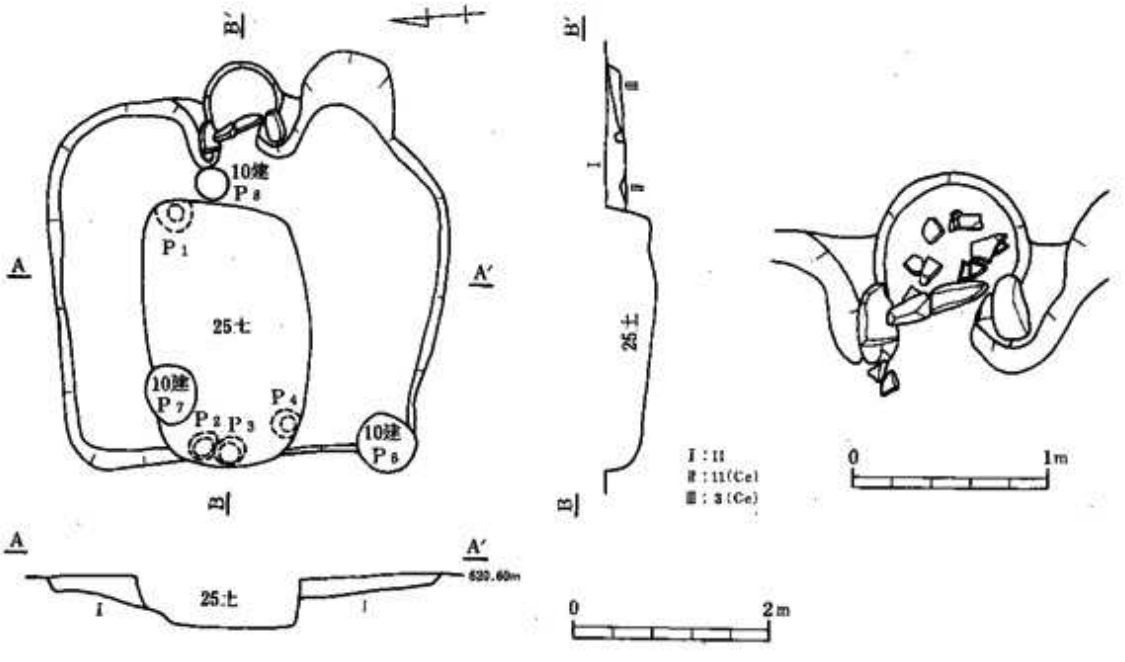


第９図　第８・11号住居址

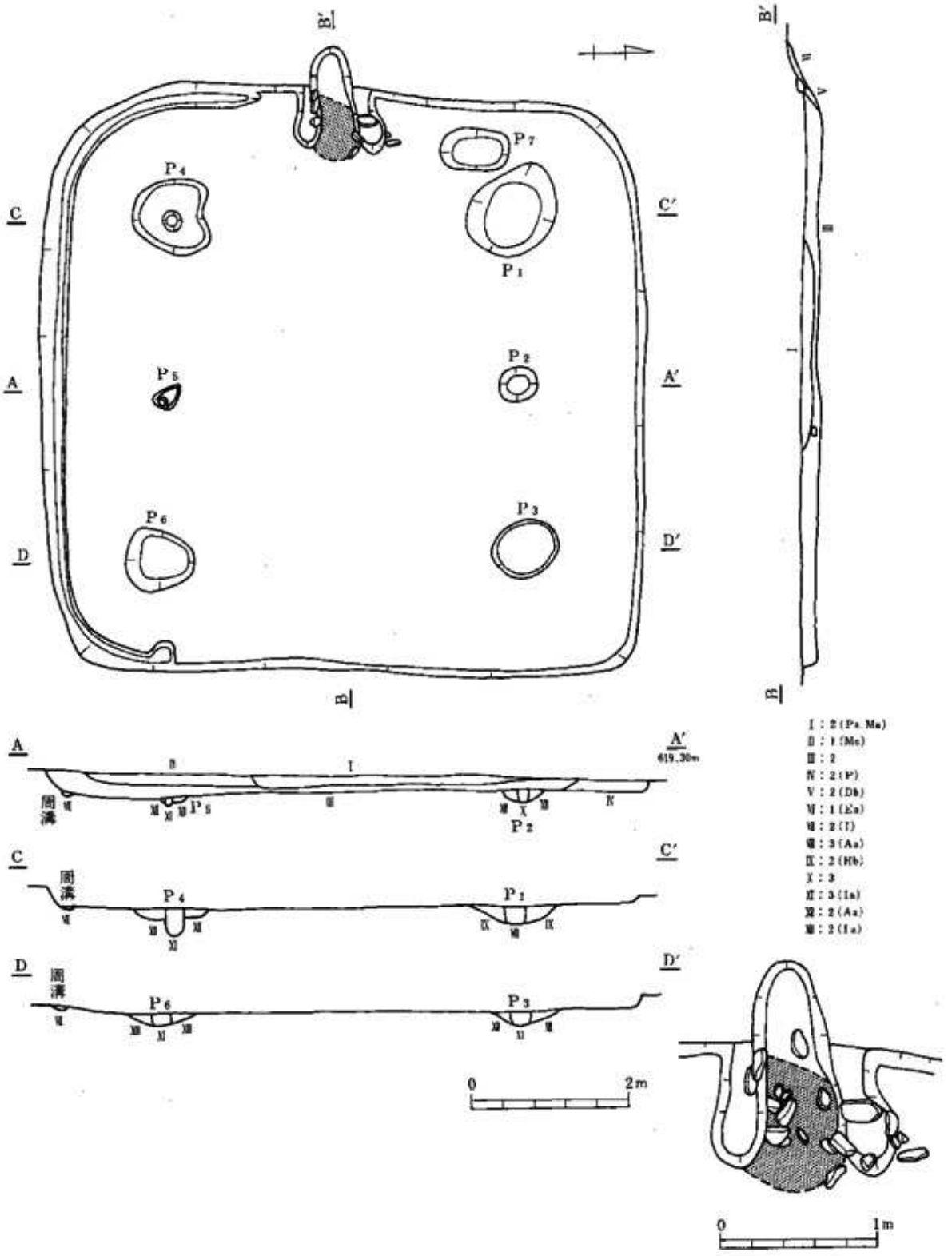
第12号住居址



第13号住居址



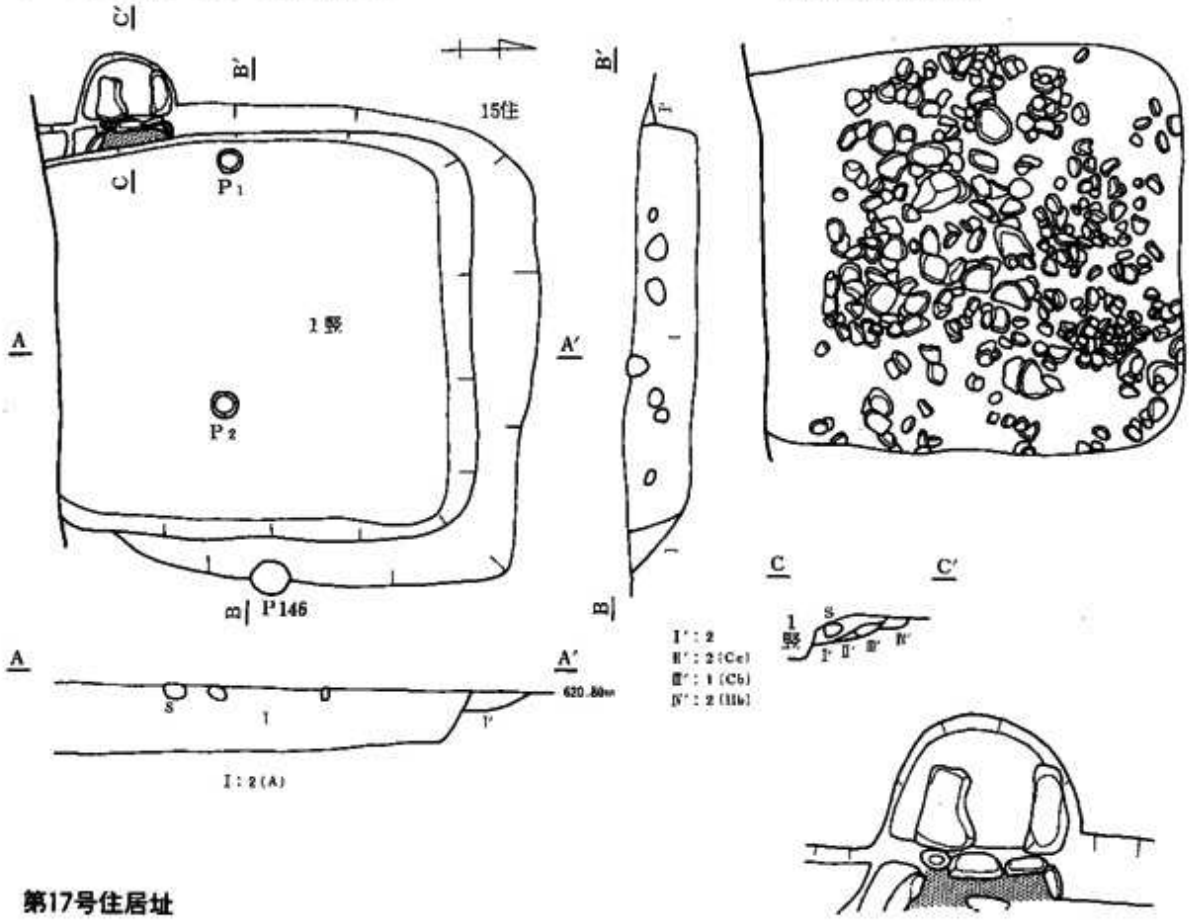
第10図　第12・13号住居址



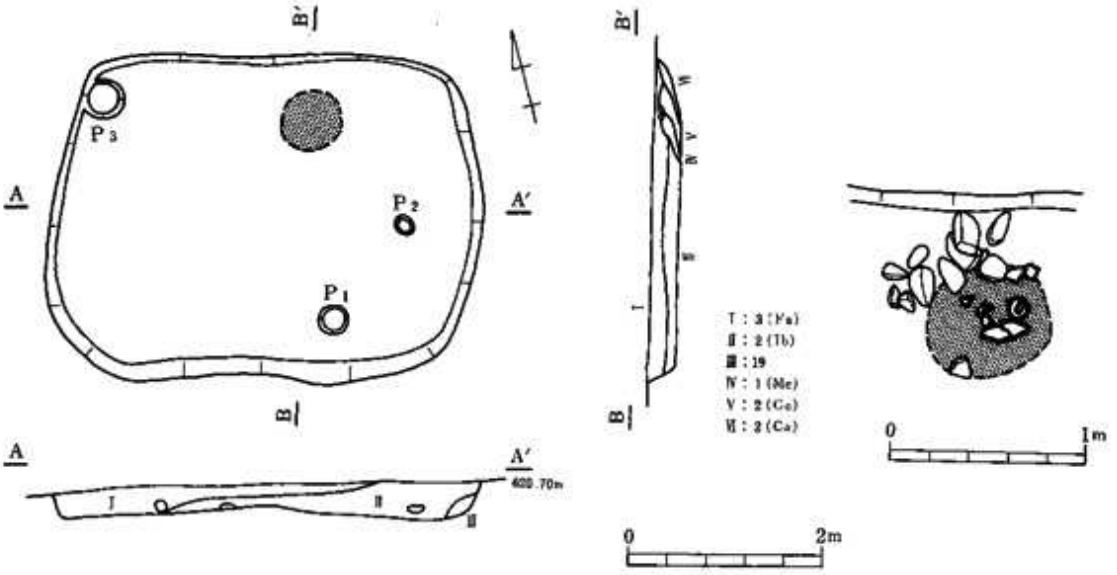
第11図　第14号住居址

第15号住居址・第１号竪穴状遺構

１竪遺物出土状況

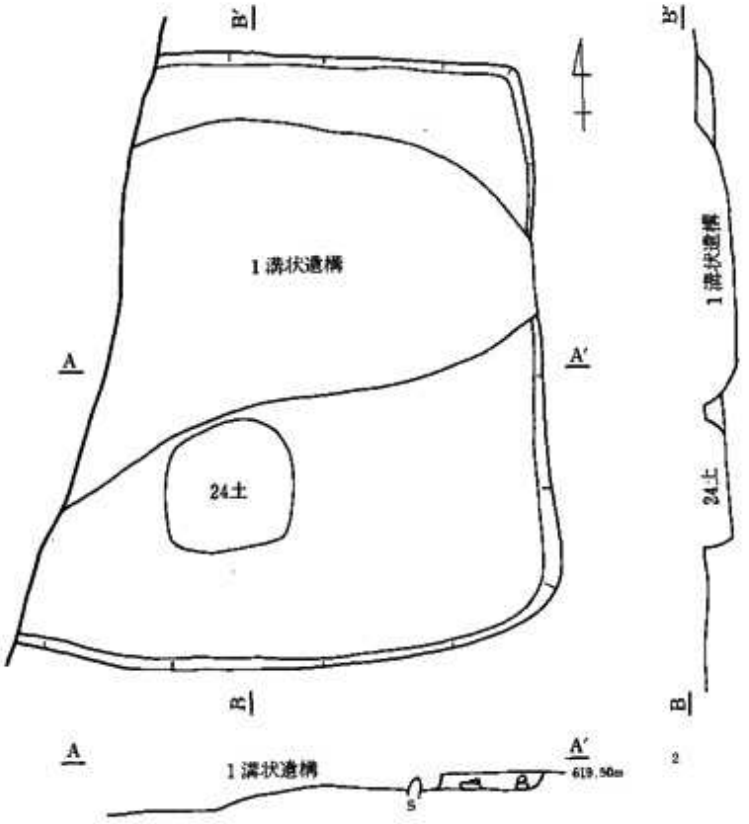


第17号住居址

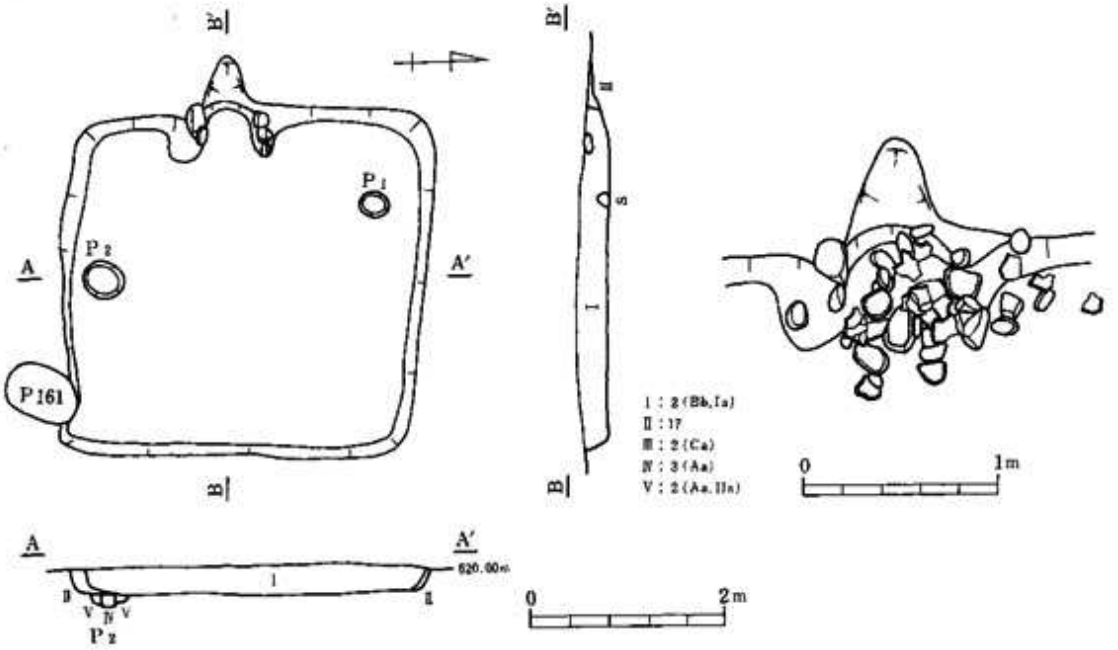


第12図　第15・17号住居址、第１号竪穴状遺構

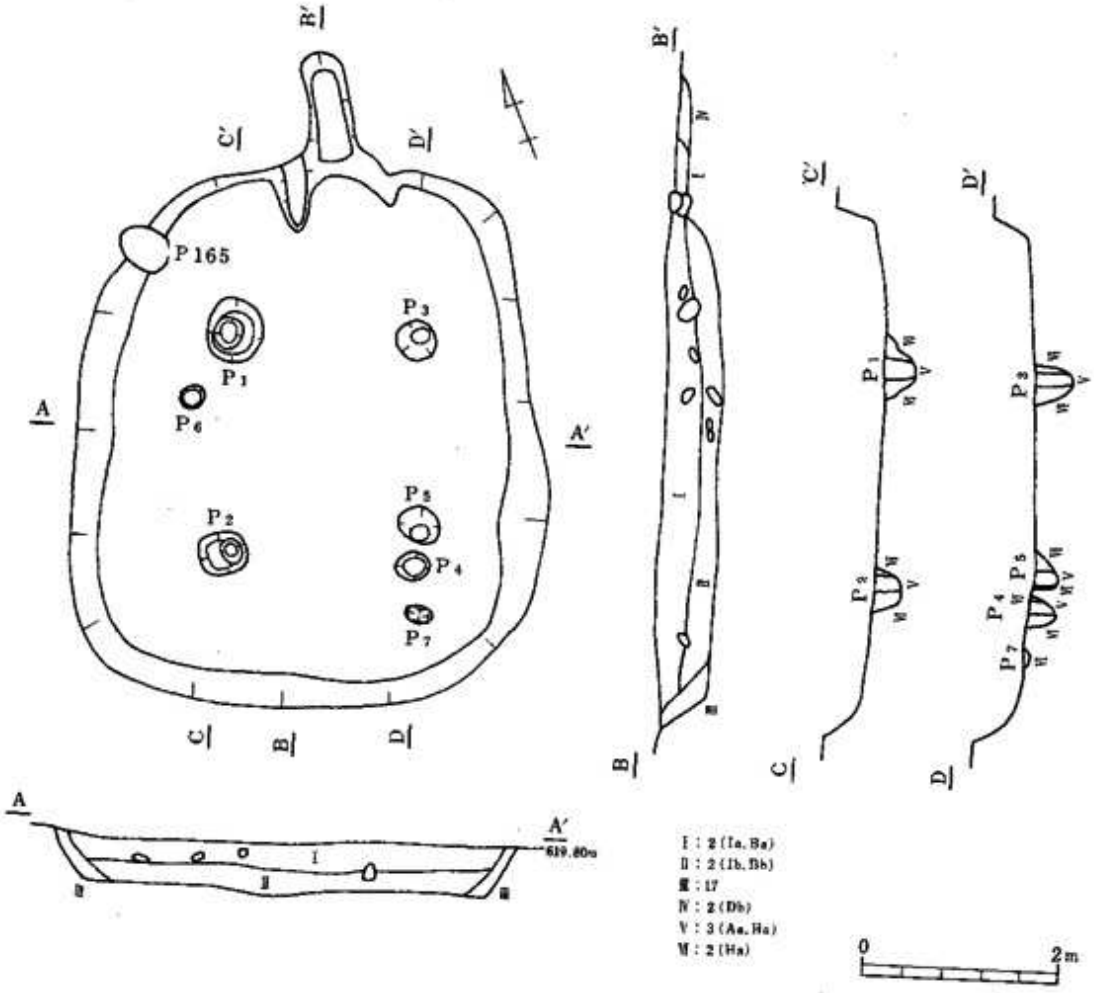
第16号住居址



第18号住居址

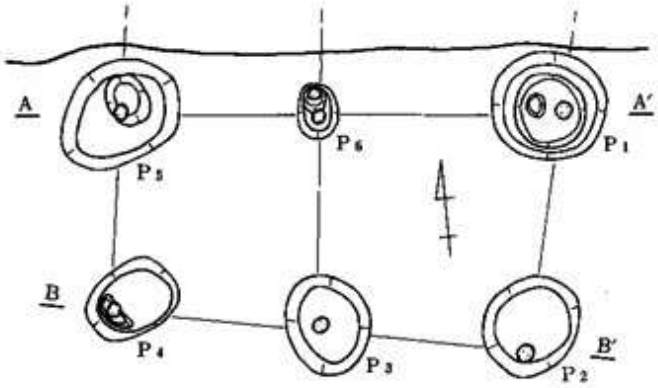


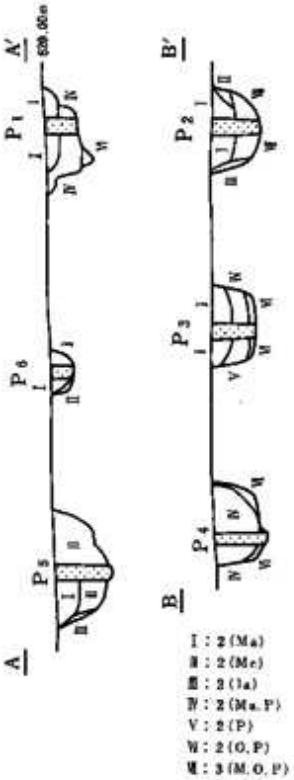
第13図　第16・18号住居址



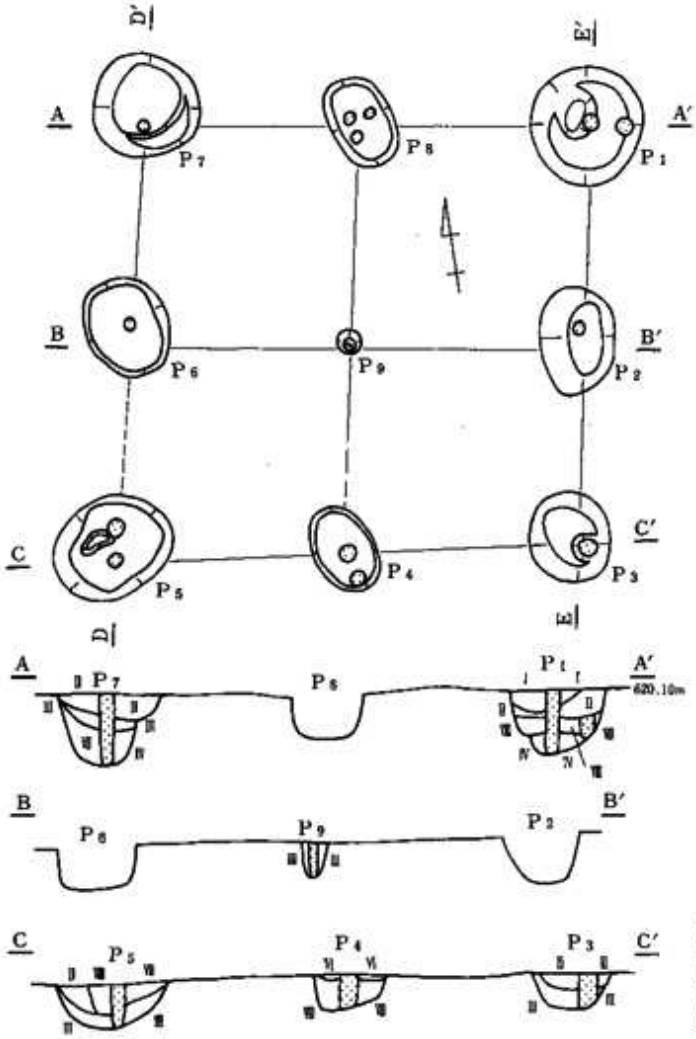
第14図　第19号住居址

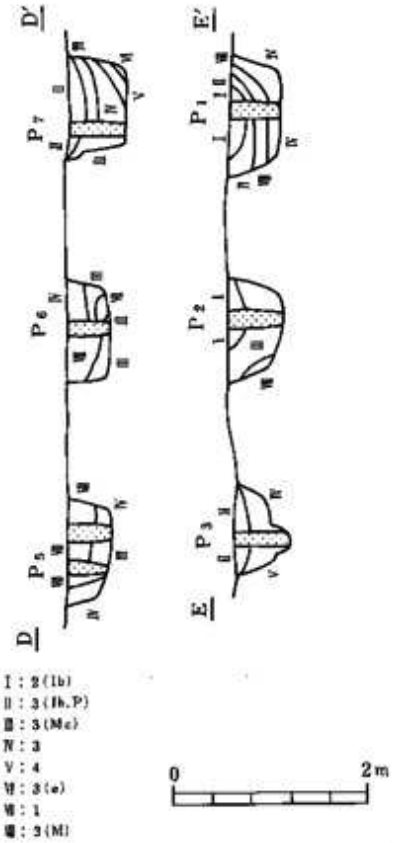
第２号建物址





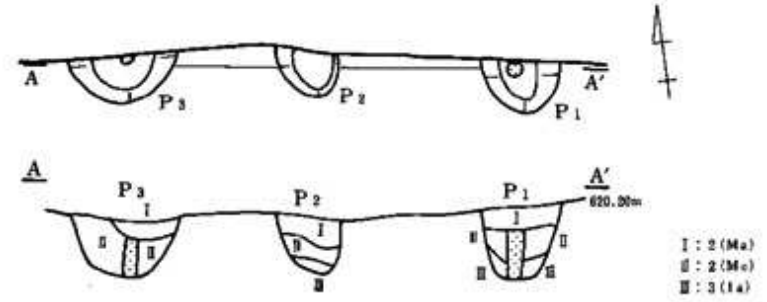
第３号建物址



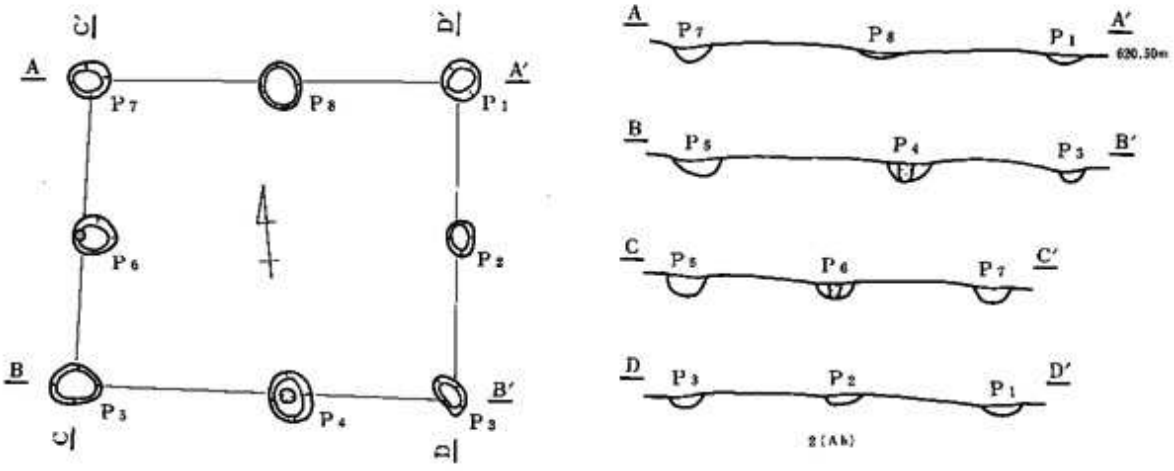


第15図　第２・３号建物址

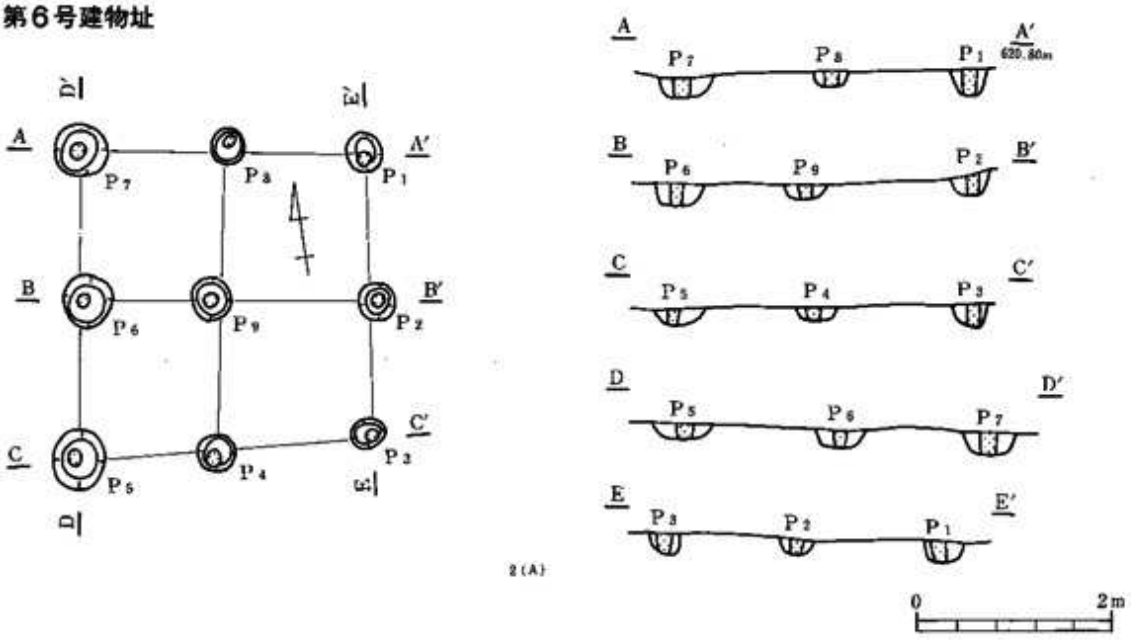
第4号建物址



第5号建物址

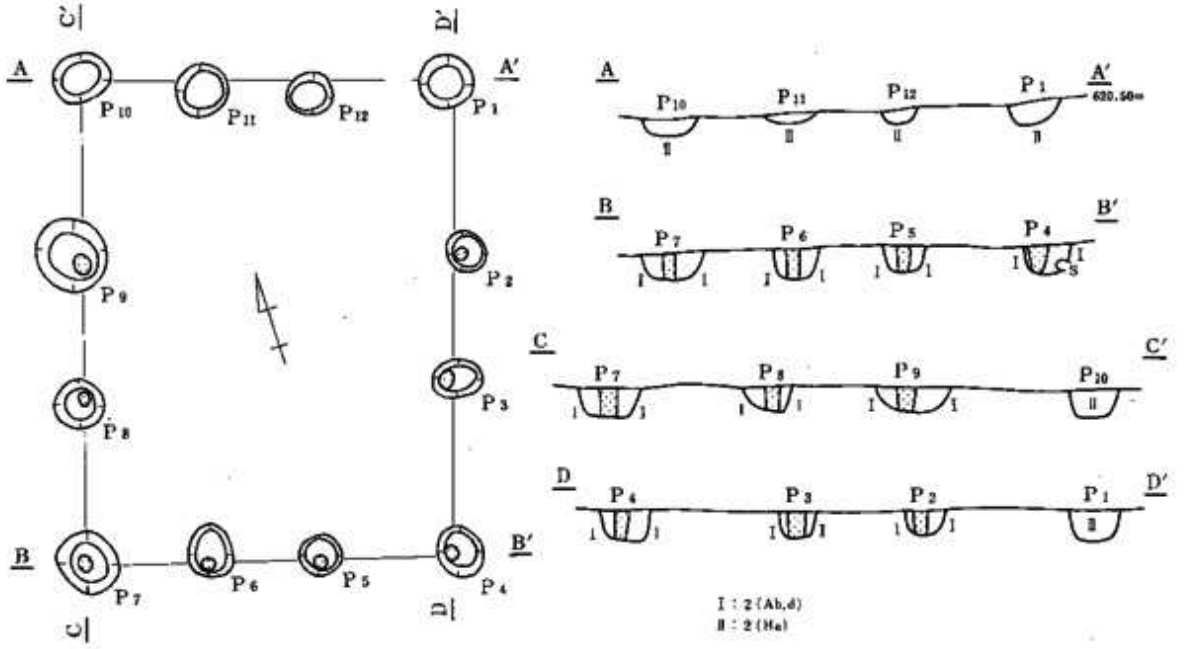


第6号建物址

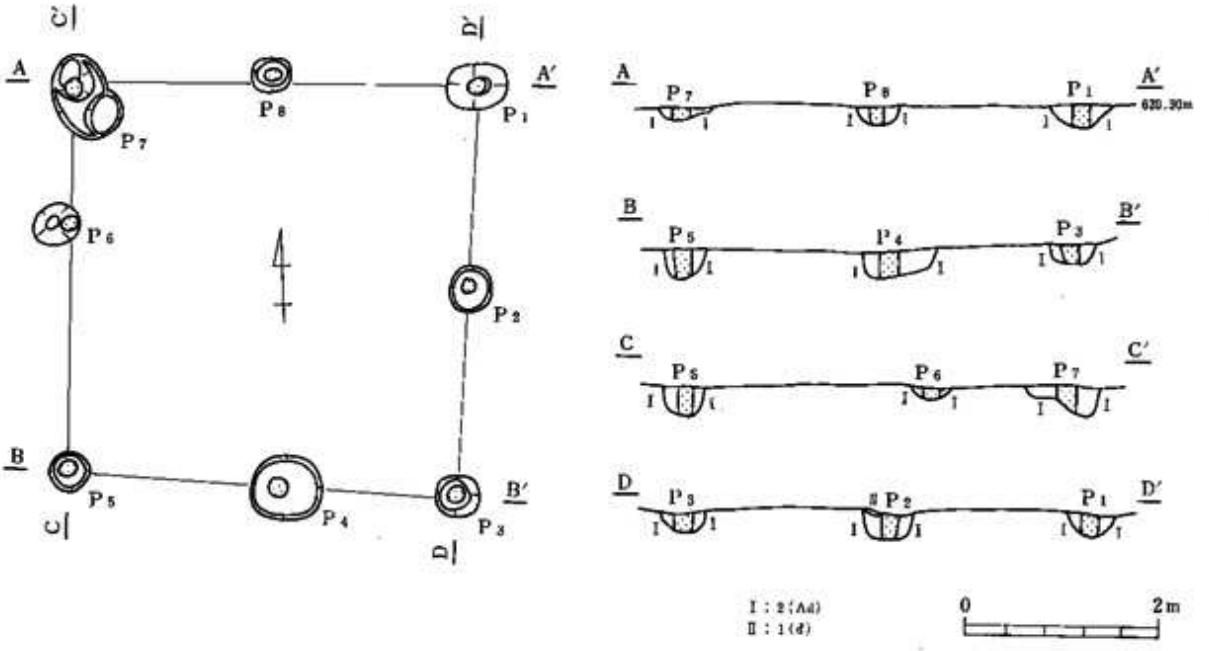


第16図　第4・5・6号建物址

第７号建物址

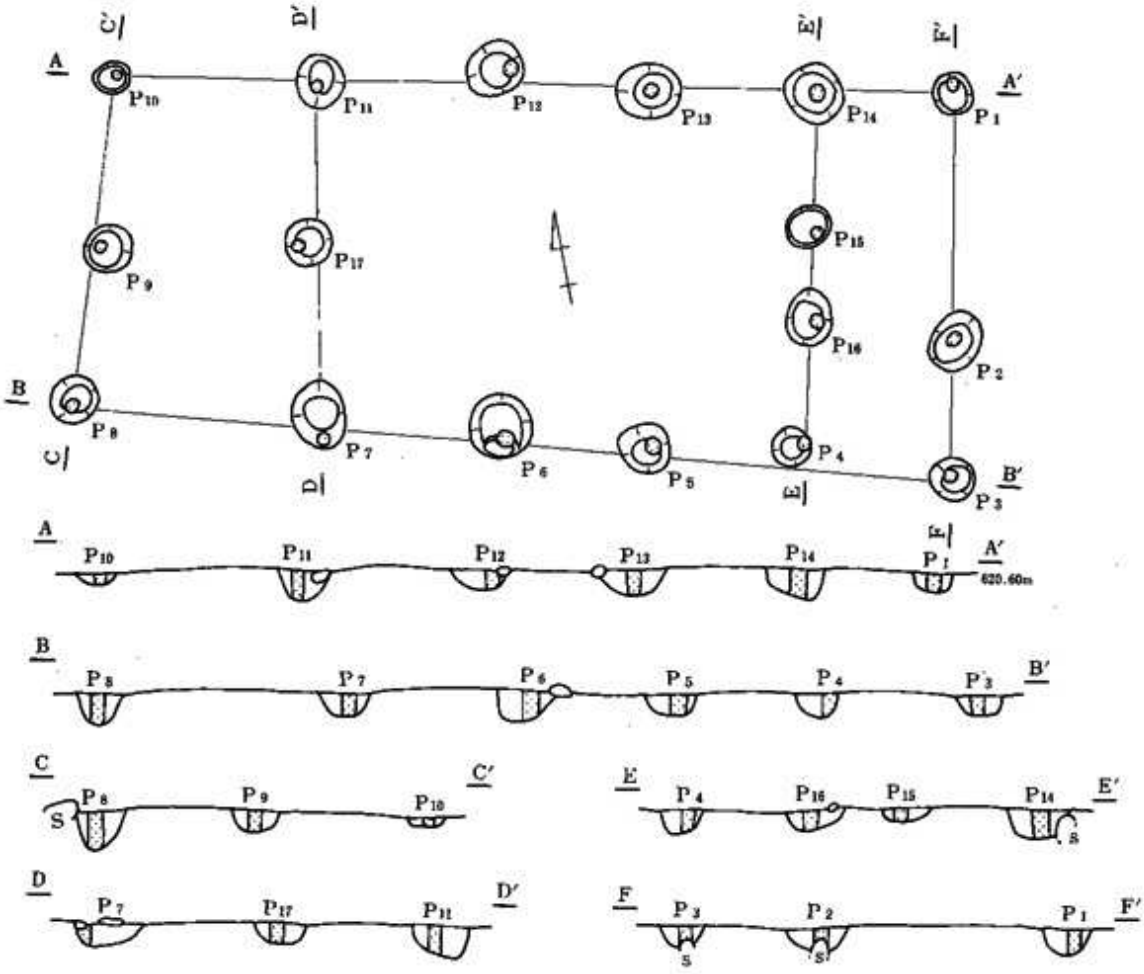


第８号建物址

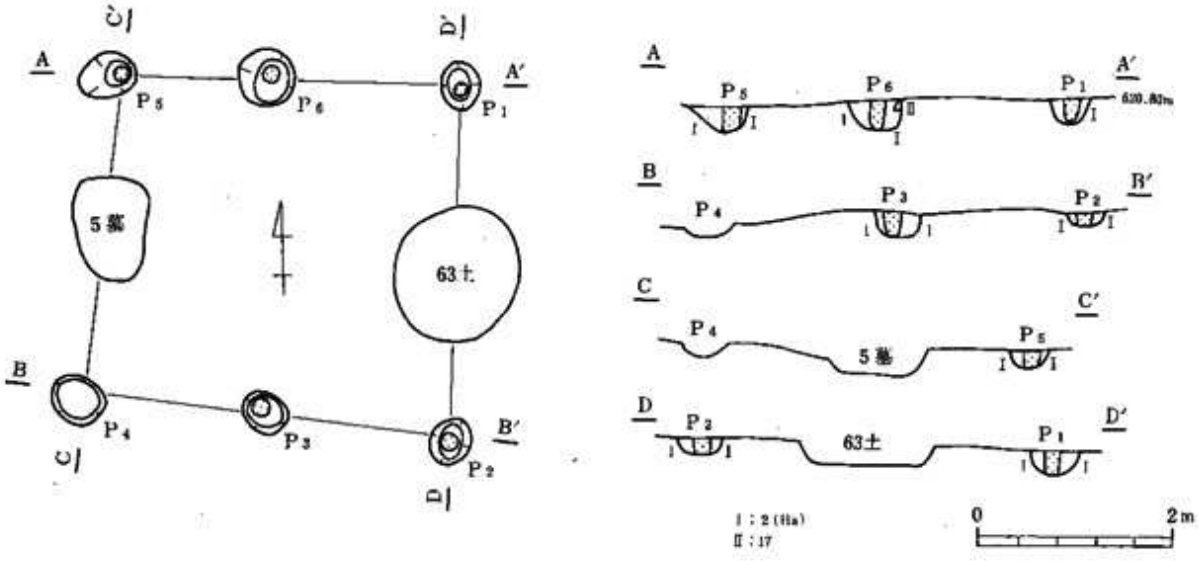


第17図　第７・８号建物址

第9号建物址

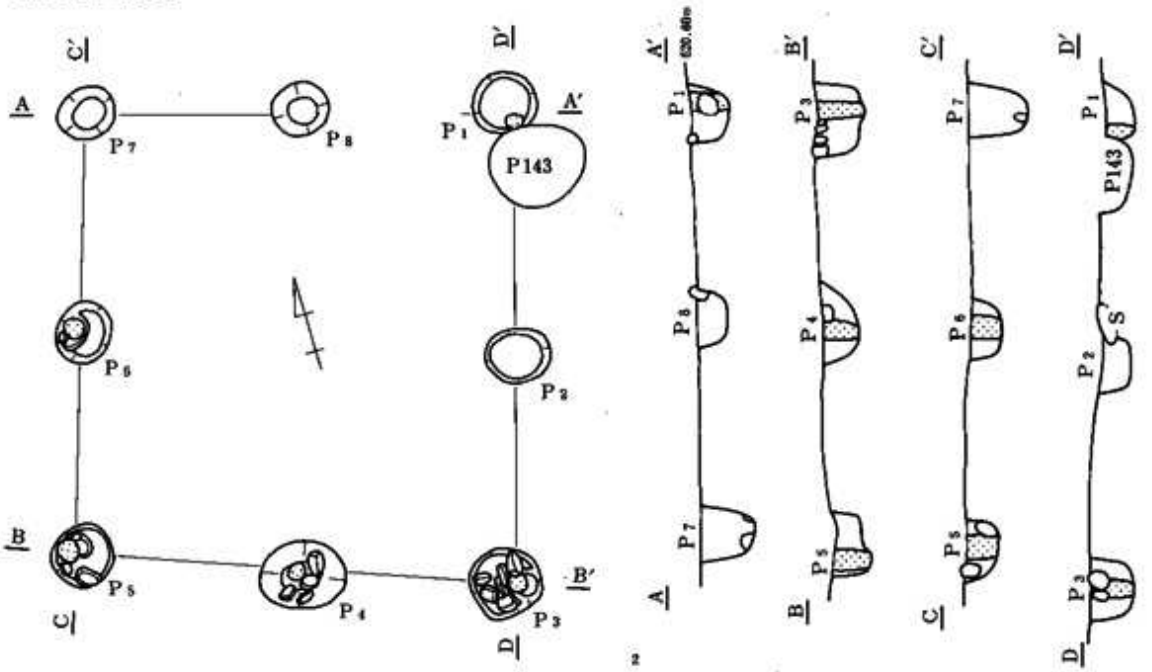


第12号建物址

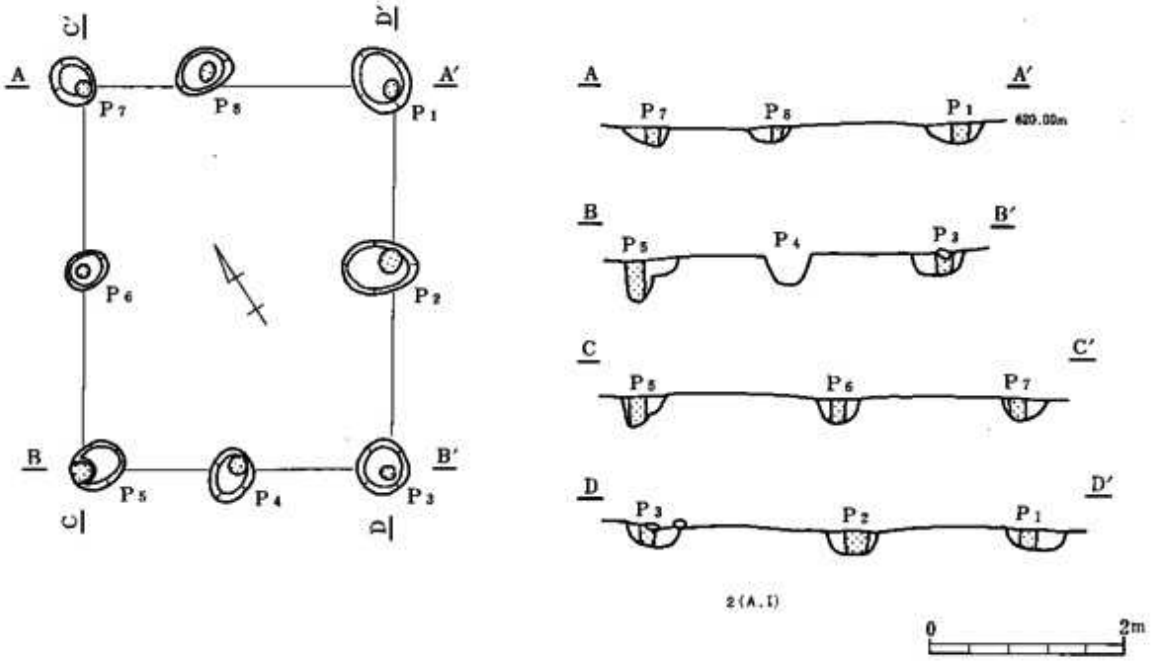


第18図　第9・12号建物址

第10号建物址

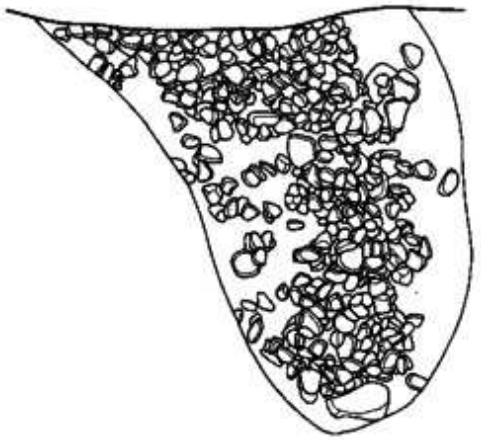


第11号建物址

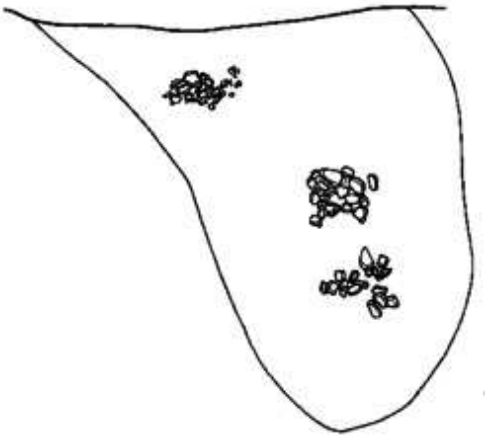


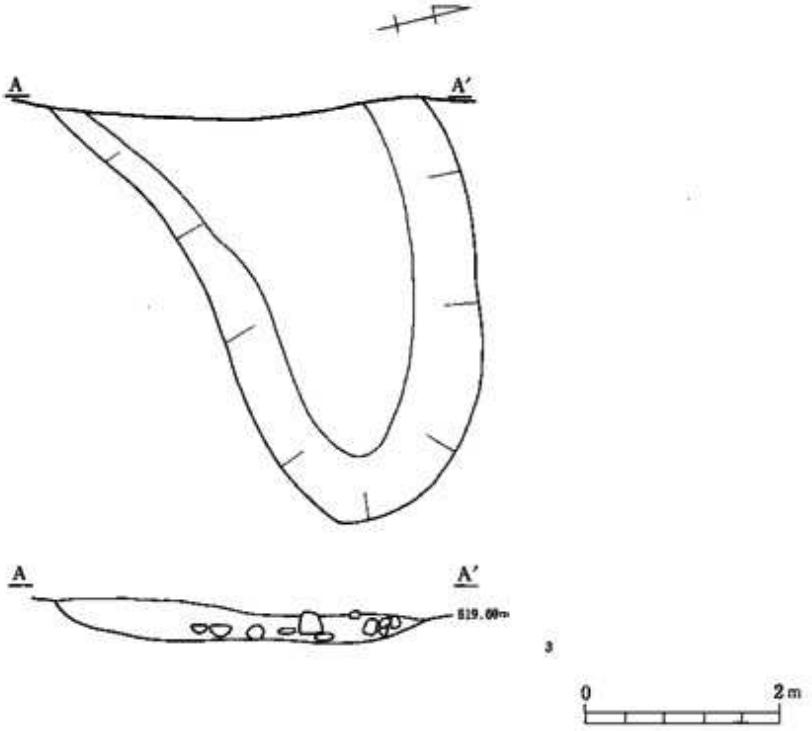
第19図　第10・11号建物址

出土状況（上面）

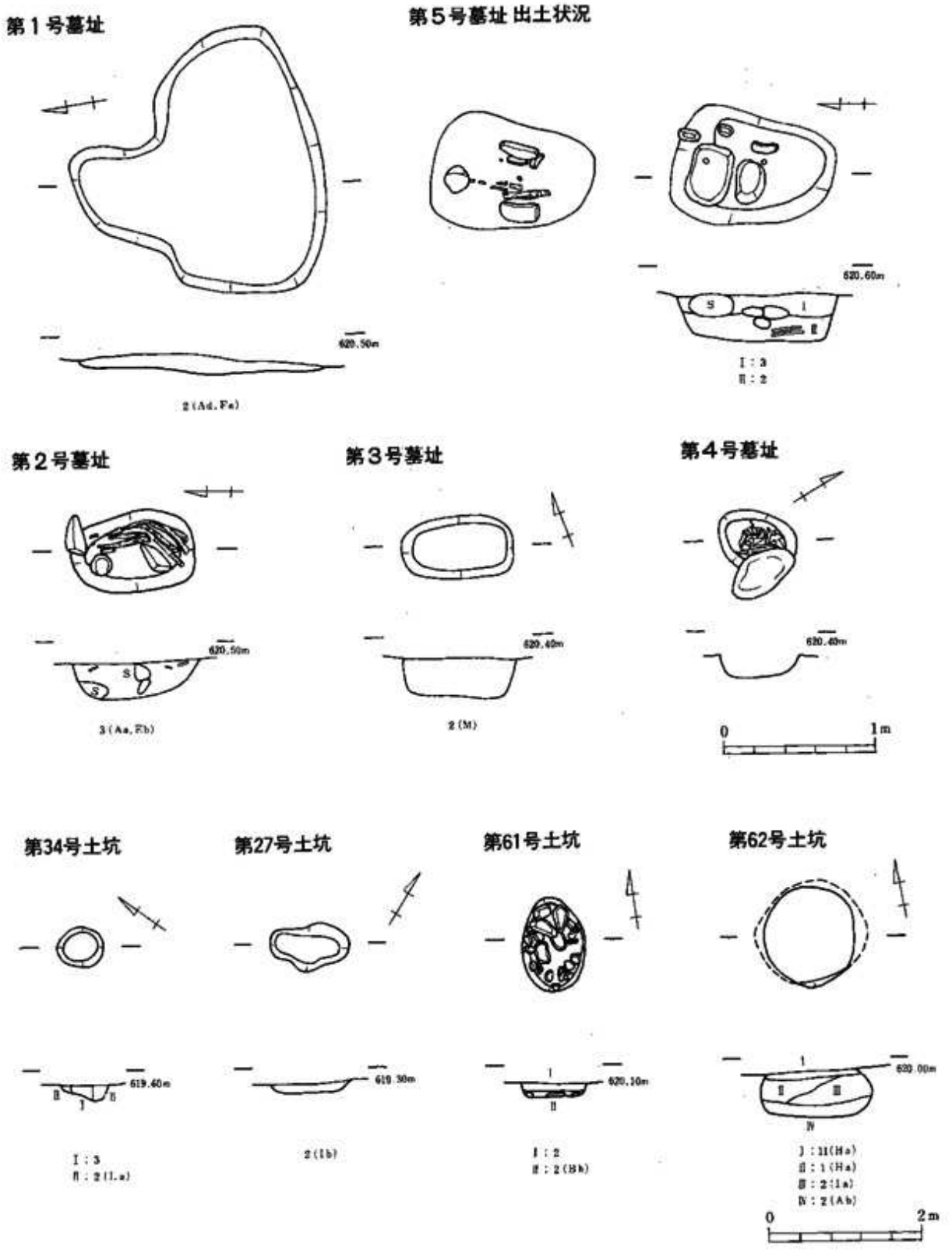


出土状況（下面）

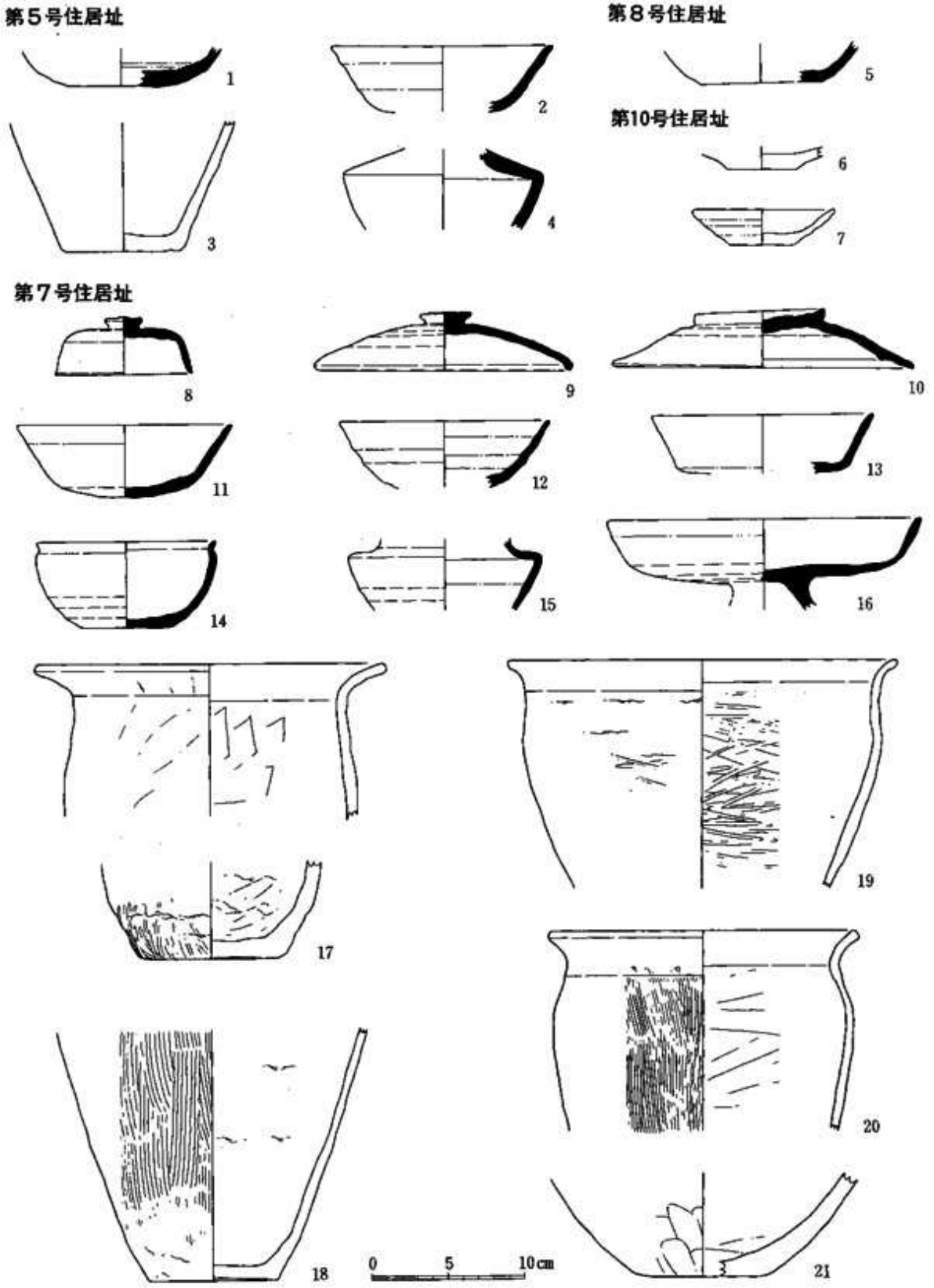




第20図　第１号溝状遺構

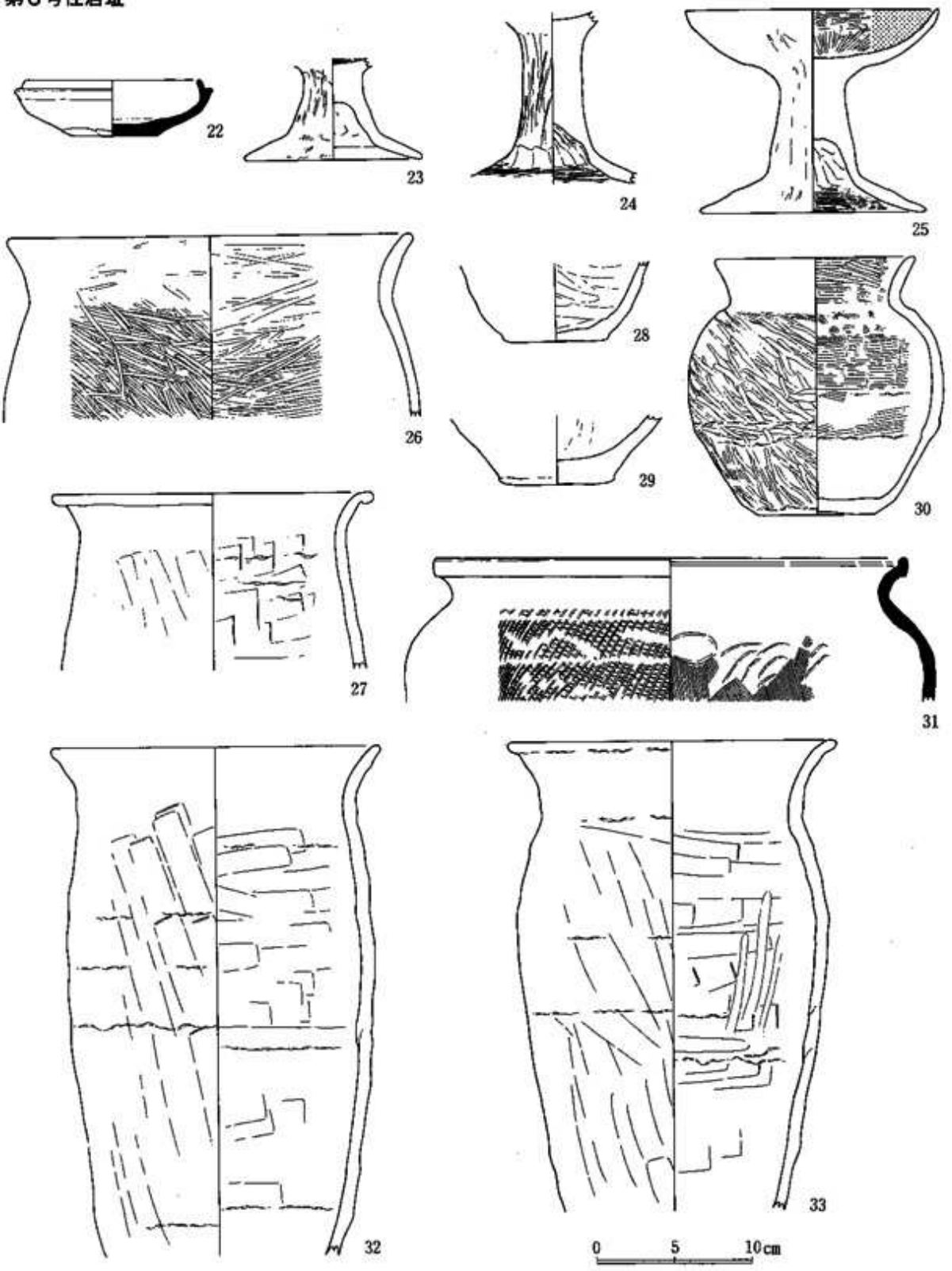

第1号墓址
2(Ad,Fa)
第5号墓址 出土状況
620.60m
I:3
II:2
第2号墓址
620.50m
3(Aa,Fb)
第3号墓址
620.40m
2(M)
第4号墓址
620.40m
0
1m
第34号土坑
619.60m
I:3
II:2(La)
第27号土坑
619.30m
2(Ib)
第61号土坑
620.10m
I:2
II:2(Hb)
第62号土坑
620.00m
I:11(Ha)
II:1(Ha)
III:2(Ia)
IV:2(Ab)
0
2m

第21図　墓址・土坑


第５号住居址
第８号住居址
第10号住居址
第７号住居址
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
5
10cm

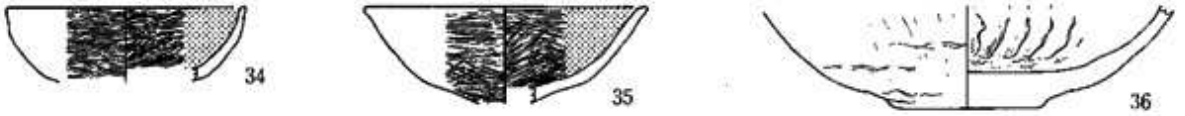
第22図　土 器 (1)

第６号住居址

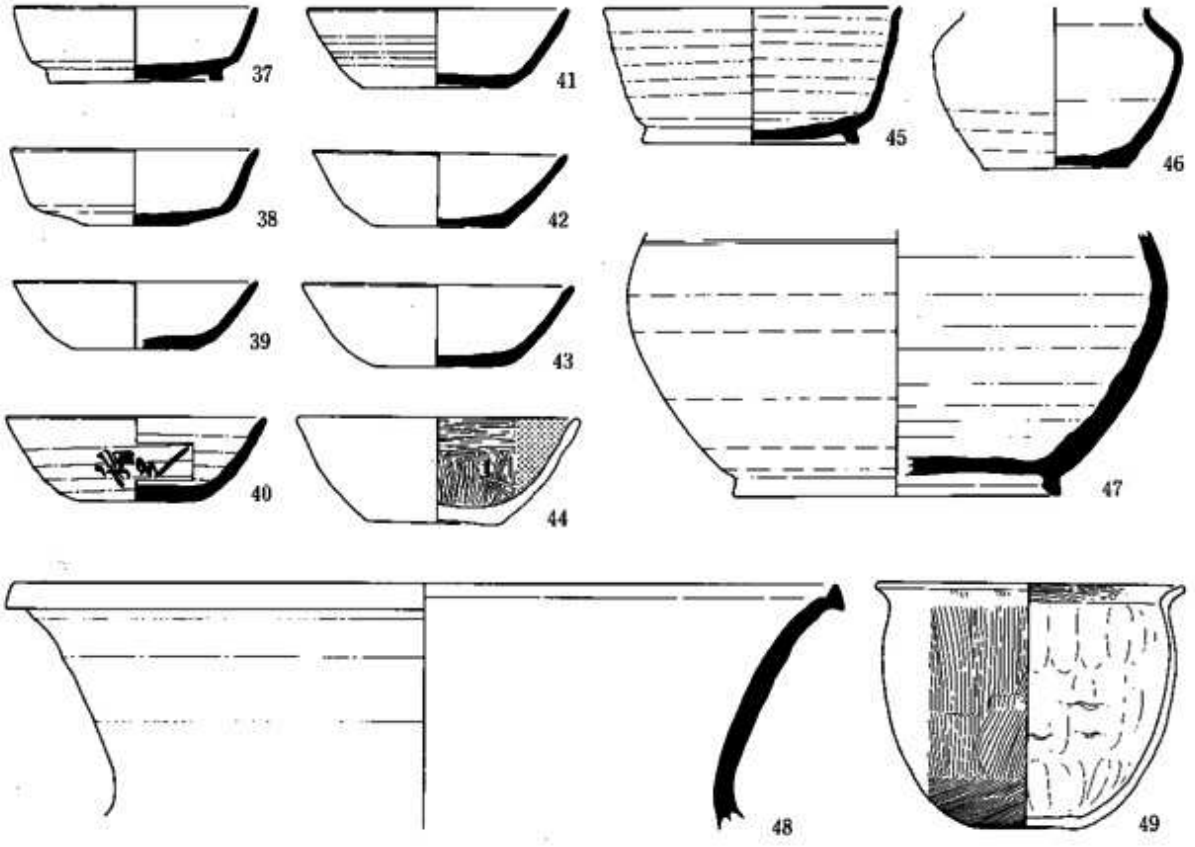


第23図　土 器 (2)

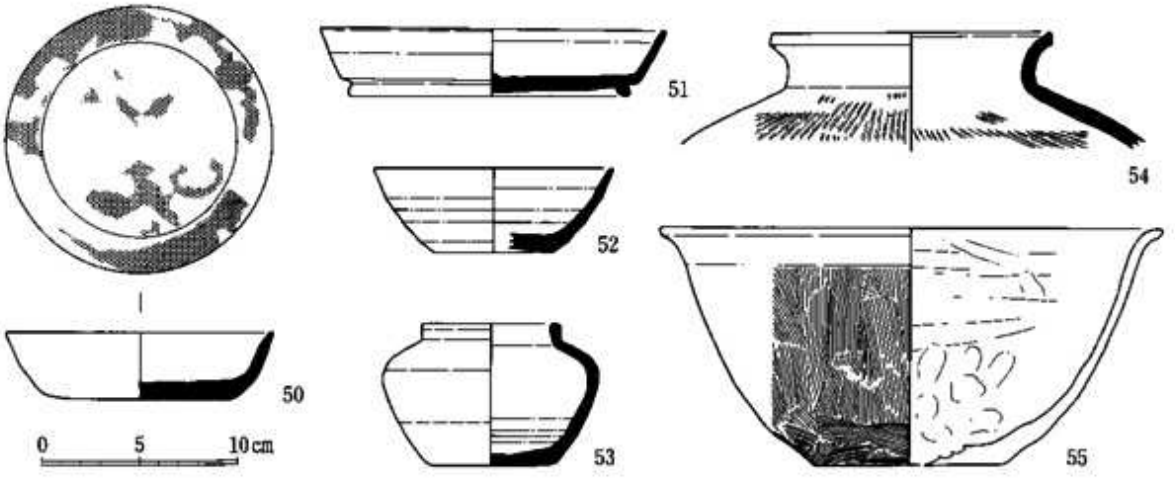
第９号住居址



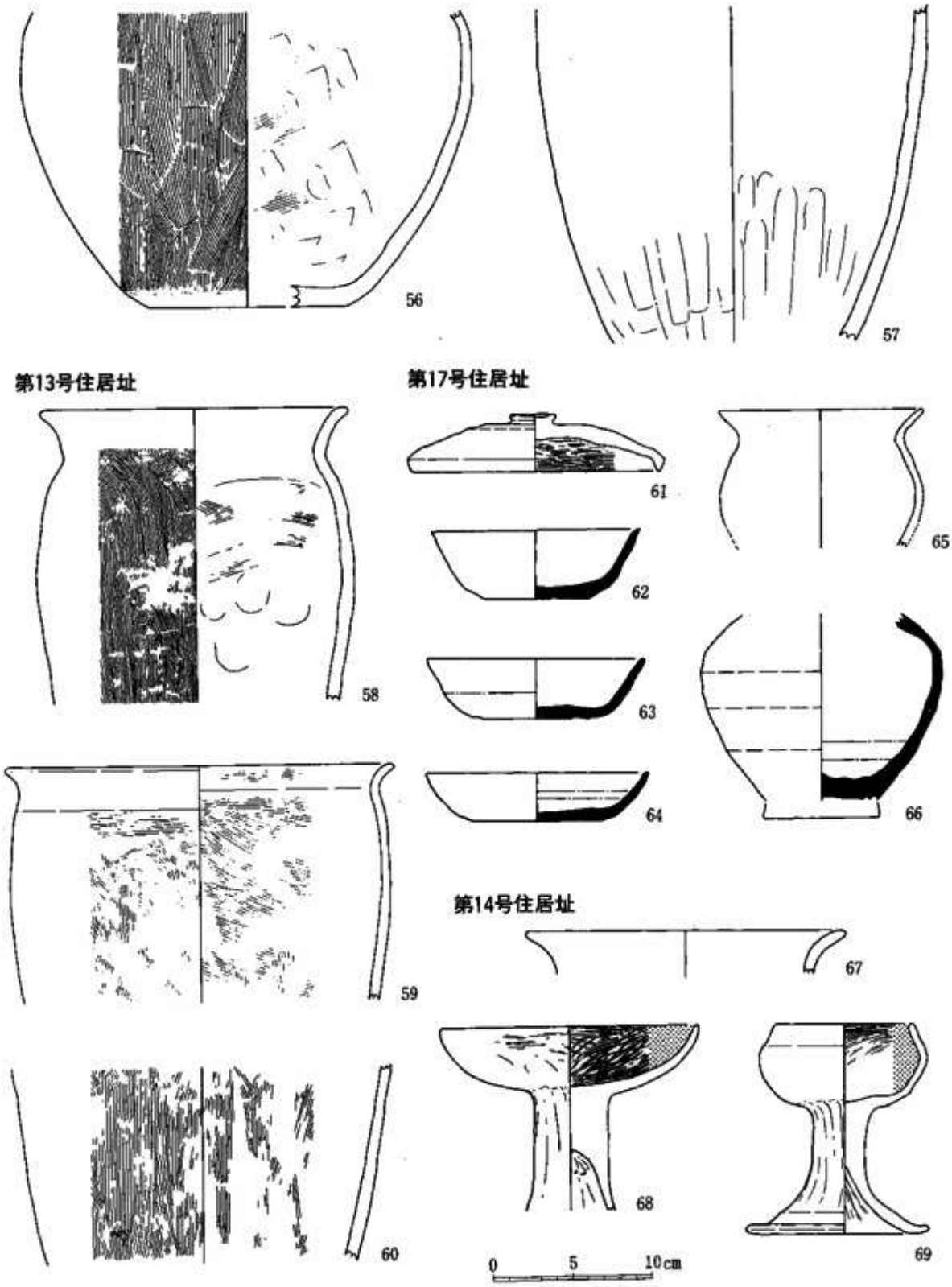
第11号住居址



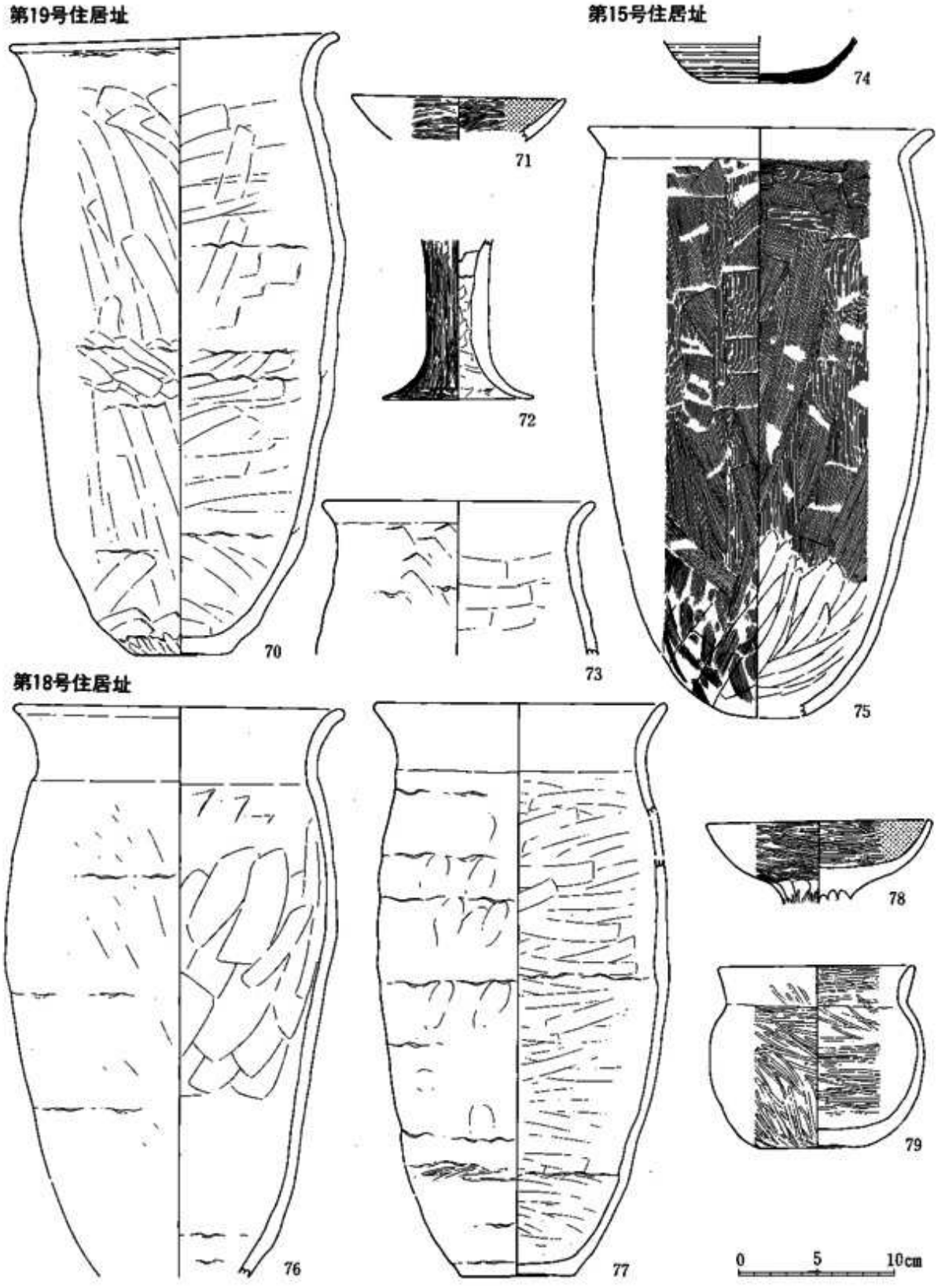
第12号住居址



第24図　土 器 (3)

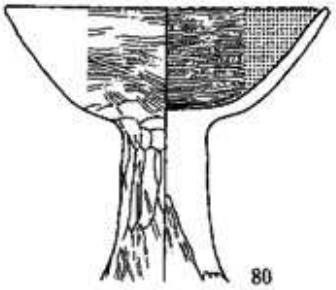

56
57
第13号住居址
58
59
60
第17号住居址
61
62
63
64
65
66
第14号住居址
67
68
69
0
5
10cm

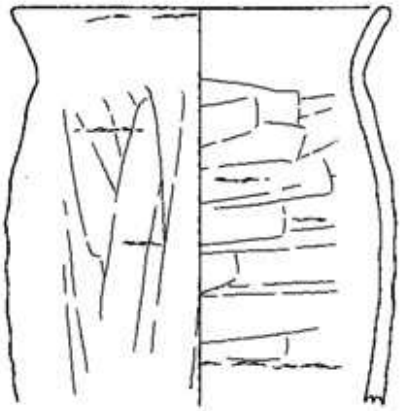
第25図　土 器 (4)

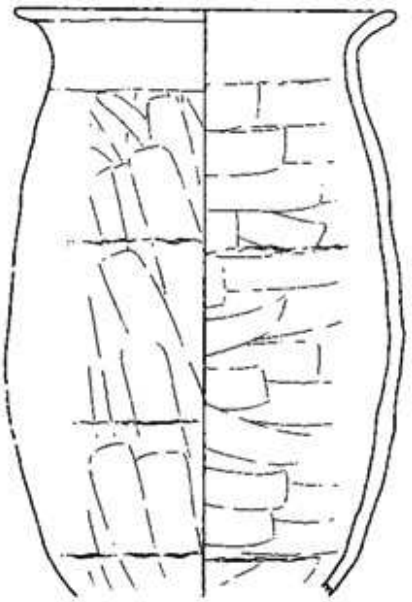


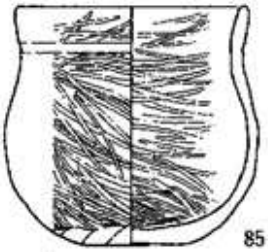
第26図　土 器 (5)

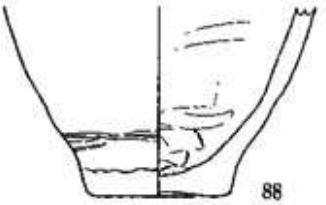
第１号溝状遺構

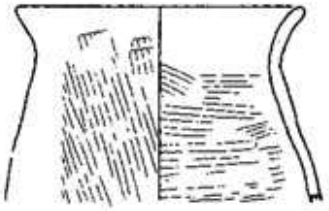




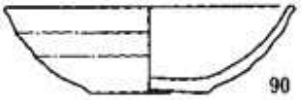




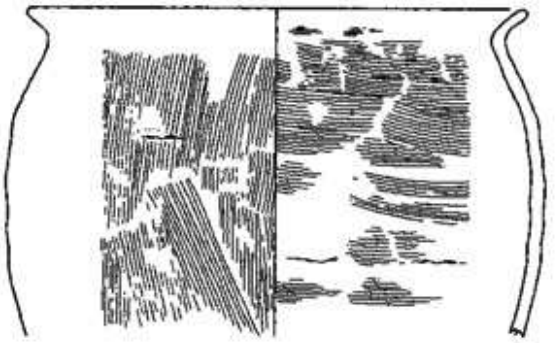




第２号建物址

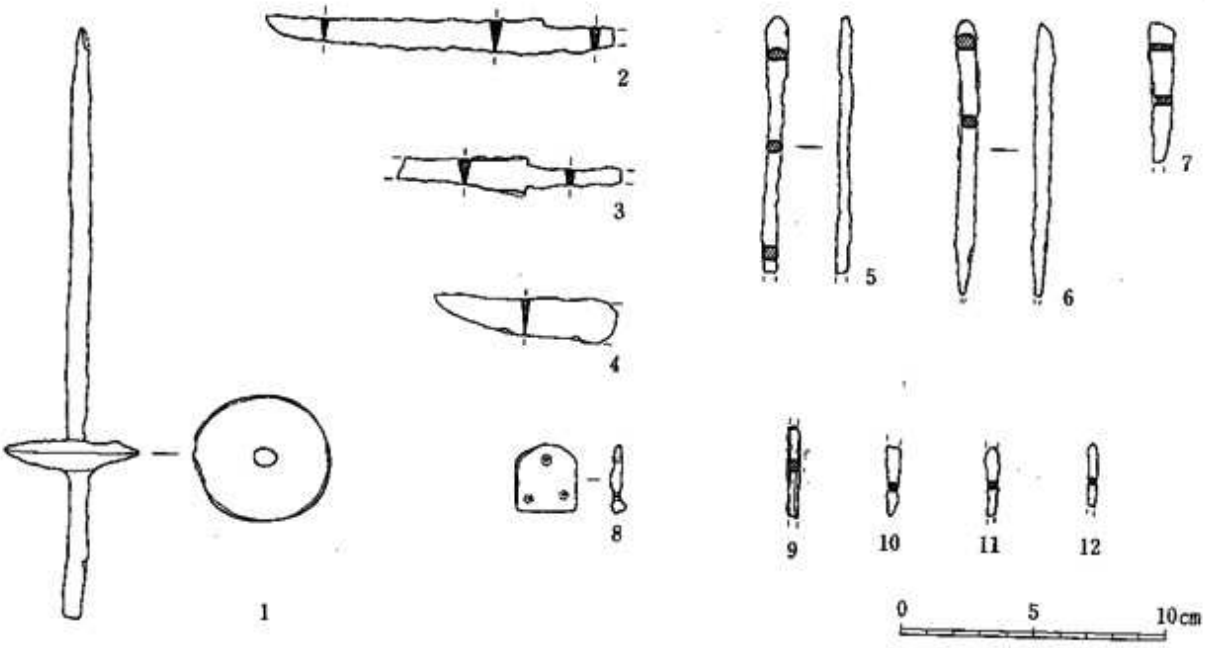


第１号土坑

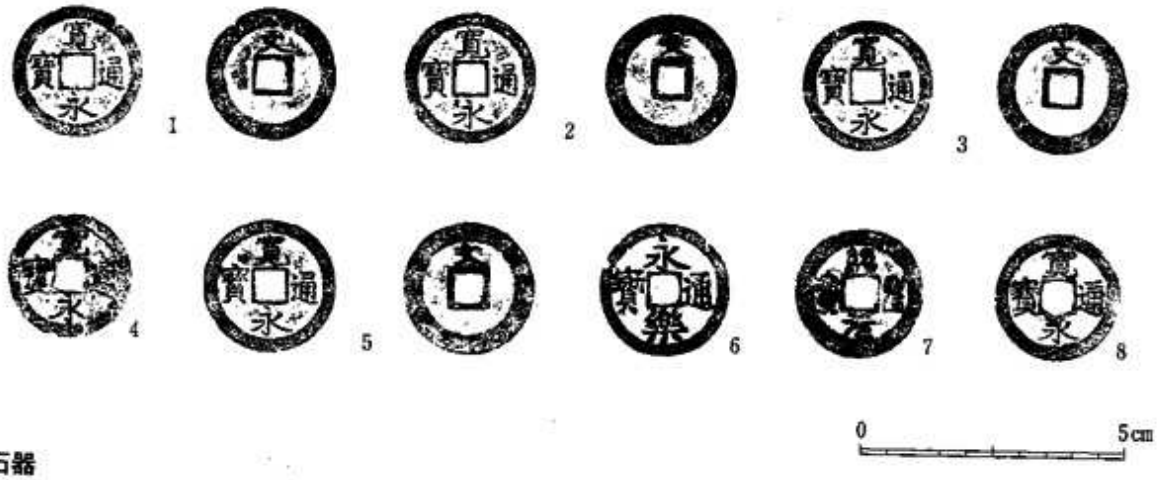


第27図　土 器 (6)

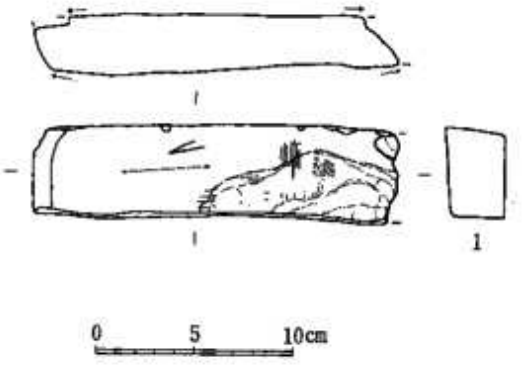
鉄製品

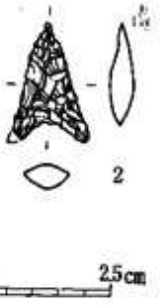


銭貨

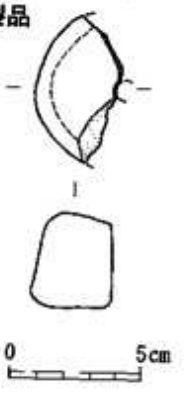


石器





土製品



第28図　鉄製品・銭貨・石器・土製品

第2表 住 居 址 一 覧 表

床面積の( )は現存面積

住居No.	図No.	平面図	規模 長軸・短軸・深さ(cm)	規模 床面積(m²)	主軸方向	カマド形態 種別	カマド形態 位置	カマド形態 煙道(cm)	新旧関係	備考
5	4	隅丸方形	512×460×32	20.5	N 93° W	粘土	西壁中央	88		
6	5	隅丸方形	644×624×44	35.4	N-102°-E	石組粘土	東壁中央	——		
7	6	隅丸方形	608×592×40	29.5	N-90°-W	石組粘土	西壁中央	88	P65より旧	
8	9	不整長方形	444×410×8	15.2	N-10°-E	——	——	——	P132・64土・7溝より旧	
9	7	隅丸方形	612×612×30	33.4	N-76°-W	石組粘土	西壁中央	116		
10	8	隅丸長方形	636×560×22	31.6	N-79°-E	石組?	東壁北隅	——	61土より旧	
11	9	隅丸方形	356×344×24	9.8	N-92°-E	石組粘土	東壁中央	100	P76・8溝より旧	
12	10	隅丸方形	360×360×36	11.5	N-86°-W	石組粘土	西壁中央			
13	10	隅丸方形	400×368×24	11.9	N-82°-E	石組粘土	東壁中央		25土・10溝より旧	
14	11	隅丸方形	768×740×32	51.1	N-90°-W	石組粘土	西壁中央	56		
15	12	隅丸方形?	488× ?×68	(17.3)	N-90°-W	石組粘土	西壁南寄り		P146・1溝より旧 区域外にかかる	
16	13	隅丸方形?	624× ?×32	(26.0)	N-0°	——	——		24土・1溝状遺構より旧、区域外にかかる	
17	12	隅丸長方形	436×330×36	11.7	N-18°-E	?	北壁中央			
18	13	隅丸方形	364×356×32	10.9	N-89°-W	石組	西壁中央	44	P161より旧	
19	14	隅丸長方形	560×476×60	18.4	N-24°-E	石組	北壁中央	112	P165より旧	

第3表 建 物 址 一 覧 表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴 備考	新旧関係
2	?	N-13°-E	×2間	桁2.0~2.5	1	116	108	46	円形	柱痕	区域外にかかる
			×4.5 (4.2)		2	106	96	48	楕円形	柱痕	
	総柱式				3	104	88	44	楕円形	柱痕	
					4	96	72	52	楕円形	柱痕	
					5	132	104	56	楕円形	柱痕	
					6	56	40	24	楕円形	柱痕	
3	正方形	N-82°-W	2間×2間	桁2.2~2.4	1	122	112	52	円形	柱痕	30土より新
			4.8×4.5 (4.5) (4.4)		2	112	76	56	楕円形	柱痕	
	総柱式			梁2.0~2.4	3	94	84	52	楕円形	柱痕	
					4	92	64	36	楕円形	柱痕	
					5	120	100	44	楕円形	柱痕	
					6	100	84	44	楕円形	柱痕	
					7	112	108	72	円形	柱痕	
					8	96	64	40	楕円形	柱痕	
					9	24	24	36	円形	柱痕	
4	?		×2間	桁1.9~2.0	1	—	80	74	——	柱痕	区域外にかかる
			×3.9		2	—	64	60	——		
					3	—	108	58	——	柱痕	
5	長方形	N-84°-W	2間×2間	桁1.6~1.9	1	40	40	10	円形		
			3.8×3.2 (3.1)		2	36	24	10	楕円形		
	側柱式			梁1.5~1.6	3	42	26	12	楕円形		

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴 備考	新旧関係
					4	52	44	16	楕円形	柱痕	
					5	50	40	20	楕円形		
					6	44	38	12	円形	柱痕	
					7	40	36	10	円形		
					8	48	44	4	円形		
6	長方形	N-9°-E	2間×2間	桁1.4~1.6	1	40	38	22	円形	柱痕	
			3.2×3.0		2	40	36	16	円形	柱痕	
	総柱式		(2.9)(2.9)	梁1.3~1.7	3	36	30	20	楕円形	柱痕	
					4	38	36	16	円形	柱痕	
					5	60	50	16	楕円形	柱痕	
					6	50	50	18	円形	柱痕	
					7	56	56	22	円形	柱痕	
					8	36	32	14	円形	柱痕	
					9	42	38	12	円形	柱痕	
7	長方形	N-18°-E	3間×3間	桁1.3~1.9	1	56	56	32	円形		8住より新
			4.9×3.8		2	42	40	24	円形	柱痕	
	側柱式		(4.8)(3.7)	梁1.1~1.4	3	52	38	27	楕円形	柱痕	
					4	52	46	28	楕円形	柱痕	
					5	44	42	26	円形	柱痕	
					6	56	48	28	楕円形	柱痕	
					7	64	56	24	円形	柱痕	
					8	52	48	26	円形	柱痕	
					9	76	72	26	円形	柱痕	
					10	60	50	28	楕円形		
					11	54	52	12	円形		
					12	48	44	13	円形		
8	方形	N-3°-E	2間×2間	桁1.3~2.5	1	64	46	22	楕円形	柱痕	11住より新
			4.2×4.1		2	46	40	26	楕円形	柱痕	
	側柱式		(3.9)(3.9)	梁1.8~2.1	3	44	42	22	円形	柱痕	
					4	76	64	28	楕円形	柱痕	
					5	42	38	28	円形	柱痕	
					6	52	42	12	円形	柱痕	
					7	88	36	28	不整楕円形	柱痕	
					8	40	36	22	楕円形	柱痕	
9	長方形	N-78°-W	3間×2(3)間	桁1.4~2.0	1	44	40	24	円形	柱痕	
			主屋		2	62	48	24	楕円形	柱痕	
	側柱式		5.1×3.6 (4.9)	梁0.9~2.0	3	44	42	22	円形	柱痕	
					4	40	40	24	円形	柱痕	
			東側庇		5	52	48	22	円形	柱痕	
			4.0×1.5 (1.0)	1.4~2.6	6	64	64	28	円形	柱痕	
			西側庇		7	70	54	22	楕円形	柱痕	
			3.4×2.5 (2.0)	1.6~1.8	8	50	44	28	楕円形	柱痕	
					9	48	48	24	円形	柱痕	

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴 備考	新旧関係
					10	40	32	10	円形	柱痕	
					11	56	48	32	楕円形	柱痕	
					12	60	56	20	円形	柱痕	
					13	60	56	28	楕円形	柱痕	
					14	56	60	28	円形	柱痕	
					15	46	44	12	円形	柱痕	
					16	60	48	20	楕円形	柱痕	
					17	48	50	24	円形	柱痕	
10	正方形	N-16°-E	2間×2間	桁2.2~2.4	1	64	64	28	円形		13住より新
			4.8×4.6		2	64	56	28	楕円形		P143より旧
	側柱式		(4.5) (4.4)	梁2.1~2.3	3	76	72	44	円形	柱痕	
					4	88	64	36	楕円形	柱痕	
					5	66	64	40	円形	柱痕	
					6	64	56	32	円形	柱痕	
					7	60	52	60	円形		
					8	60	56	32	円形		
11	長方形	N-33°-E	2間×2間	桁1.7~2.1	1	68	56	20	楕円形	柱痕	
			3.9×3.1		2	80	56	24	楕円形	柱痕	
	側柱式			梁1.3~1.8	3	54	54	22	円形	柱痕	
					4	52	44	32	円形	柱痕	
					5	56	44	42	楕円形	柱痕	
					6	44	38	24	楕円形	柱痕	
					7	52	44	22	円形	柱痕	
					8	58	44	14	楕円形	柱痕	
12	方形	N-3°-E	2間×1間	桁1.5~2.0	1	48	40	24	円形	柱痕	63土、5墓より旧
			3.8×3.6		2	48	42	16	楕円形	柱痕	
	側柱式		(3.5) (3.3)	梁3.3~3.6	3	44	36	26	楕円形	柱痕	
					4	56	48	12	楕円形		
					5	60	44	24	楕円形	柱痕	
					6	56	60	30	円形	柱痕	

第4表 出土銭一覧表

No.	出土遺構	名称	初鋳年	径(mm)	質量(g)	備考
1	5 墓址	寛永通宝	1636	2.52	3.10	寛文亀井戸銭（文銭）
2	5 墓址	寛永通宝	1636	2.51	3.50	〃
3	5 墓址	寛永通宝	1636	2.51	2.90	〃
4	5 墓址	寛永通宝	1636	2.37	2.60	腐蝕顕著　元禄京都銭か？
5	5 墓址	寛永通宝	1636	2.52	3.60	寛文亀井戸銭（文銭）
6	5 墓址	永楽通宝	1408	2.50	3.05	模鋳銭
7	60 土坑	熙寧元宝	1068	2.45	3.07	
8	1 竪	寛永通宝	1636	2.39	2.78	元禄京都銭か？

写　真　図　版

調査前の全景（北から）

全　　景（北西から）

全　　景（南西から）

全　　景（南から）

第5号 住 居 址

同　カ マ ド

第6号 住 居 址

同　遺物出土状況

第7号 住 居 址

同 カ マ ド

第9号 住 居 址

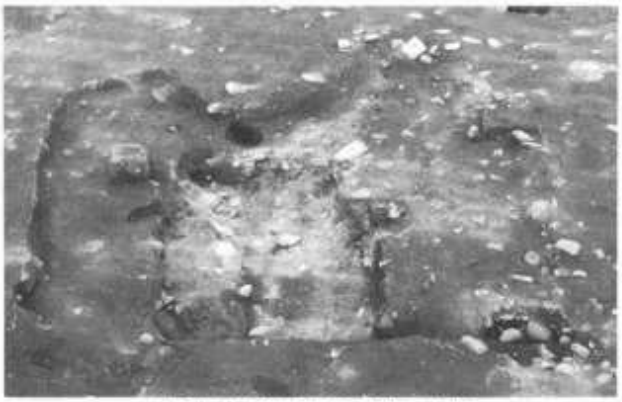
第10号 住 居 址

第11号 住 居 址

同 カ マ ド

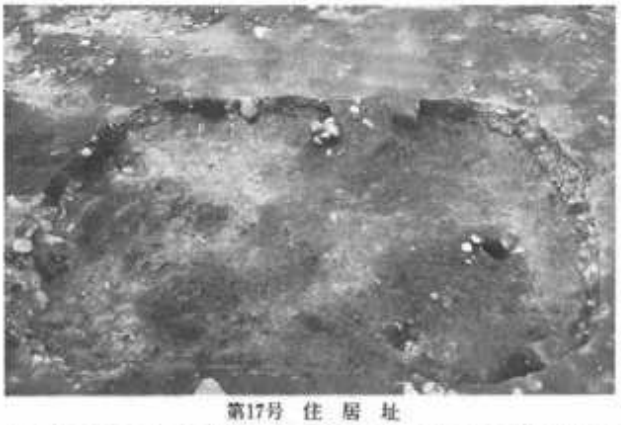
第12号 住 居 址

同 カ マ ド



第13号 住居址・第25号 土坑（中央）

第15号 住居址・第1号 竪穴状遺構



第17号 住 居 址

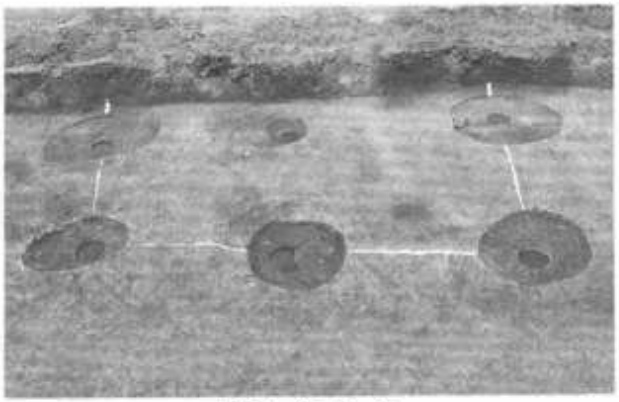
第18号 住 居 址

第19号 住 居 址

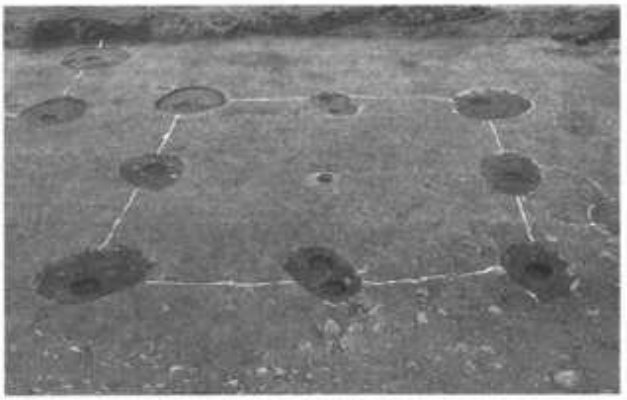
同 カ マ ド

第1号 溝状遺構（礫出土状況）

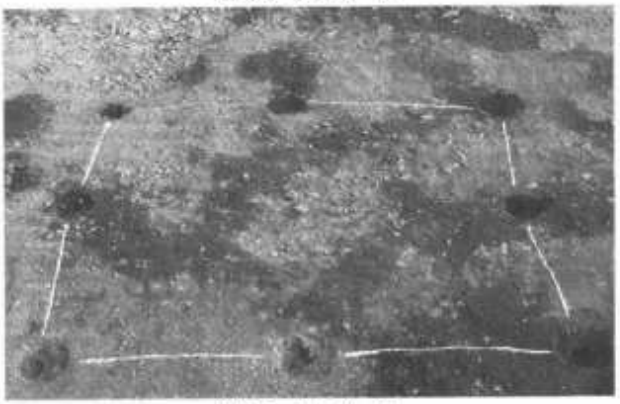
同 （馬歯・土器出土状況）



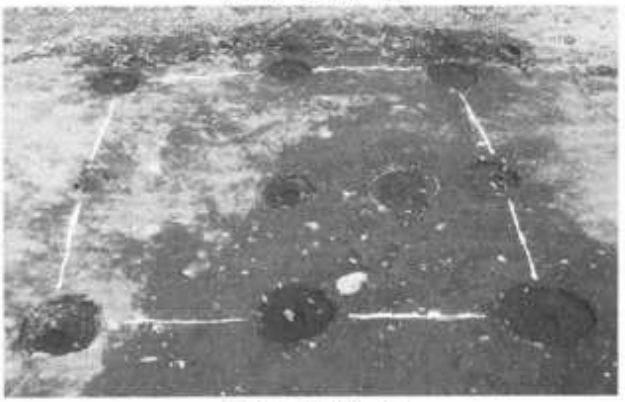
第2号 建 物 址



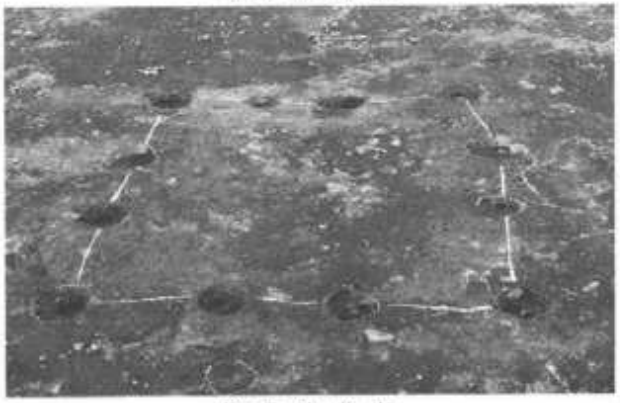
第3号 建 物 址



第5号 建 物 址



第6号 建 物 址



第7号 建 物 址

第10号 建 物 址

第2号 墓 址

第5号 墓 址

9

10

11

16

22

30

38

43

26

3

40

4

44

4

46

4

50

51

63

64

66

68

73

78

69

76

7

鉄　鏃

刀　子

紡　錘　車

不　明　品

馬　具

松本市文化財調査報告 No.106

松本市下原遺跡 II

平成5年3月22日　印刷
平成5年3月22日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3−7
TEL 0263(34)3000
発行　松本市教育委員会
印刷　精美堂印刷株式会社